

浄土

正月号



法然上人鑽仰会

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和二十四年四月二十八日 運輸省(特別授受記録第三五二号)
昭和三十六年十二月二十五日 印刷 昭和三十七年一月一日発行

第二十八卷

第一号

修養しめくり

◇日日の修養に無言の布教◇

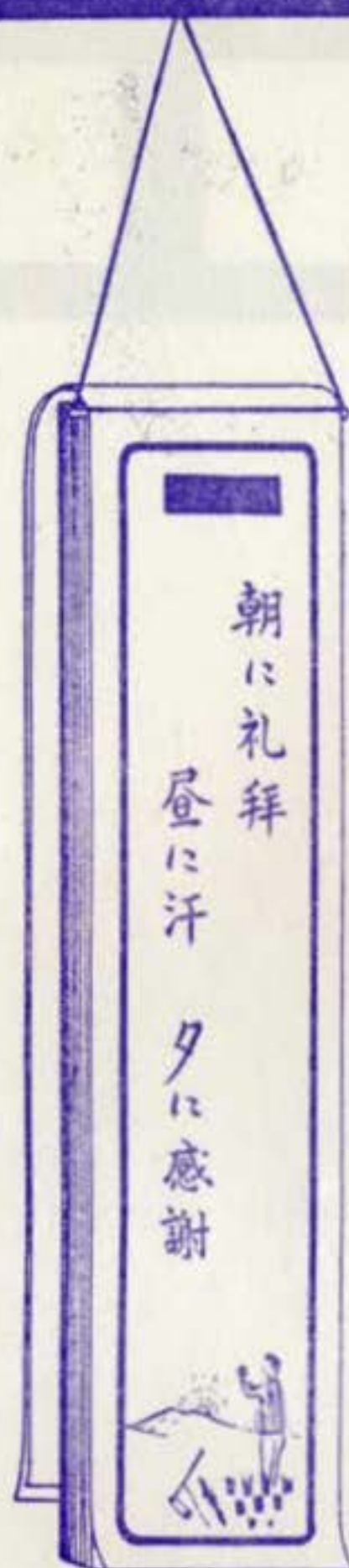
価格 一〇〇円 送料 四〇円

(一〇〇迄送料実費)

体裁 タテ 43 cm × ヨコ 14 cm 上質紙使用

美麗 二色刷 三二枚綴

割引 一〇部以上一割引 五〇部以上二割引



(内容見本)

ご希望の方に貴寺院名の印刷をいたします (但し表紙)

50部以上より 1部につき 4円

100部以上より 印刷サービス

申込先 東京都千代田区
飯田町 2 の 8

法然上人鑽仰会

振替東京 82187
電話 (332) 5944

浄土 正月号

凡は後学畏べしと云て、学生はかならずしも、先達なればということはないきなり。

法然上人御法語



中央アジア・アスターナの墓から出土した絹の掛けもの（七世紀）古代の王伏儀（神農）とその妃女媧。頭部の中間に太陽を表す。

浄土 正月号 目次

表紙……観音菩薩像（奈良 法隆寺）

身と命と財とを捨つ……………佐藤密雄……（二）

随筆 まんじまんだん……………上村真肇……（一六）

病床の法然上人……………（二四）

微笑続ける上人御像……………鈴木成元……（二〇）

中国綺談 虎の跳躍二則……………牧尾良海……（二三）

近代高僧伝 黒田真洞……………大橋俊雄……（二〇）

行住座臥の教……………北出立仙……（二四）

童話 ハントクの手……………高橋良和……（二六）

実話 指揮のサボタージュ……………吉野翠幹……（二八）

キリスト教の伝道師（六） 今日一日の尊さ……………（二七）

火宅の世の中……………（一九） 求め得ぬ芥子……………（二九）

七種類の妻……………（二三） 扉の御法語……………（九）

禍を持ち帰るな……………（二七） 表紙の写真……………（二五）

大映「釈迦」を排撃……………（三三）

聖典 講義 ふり仰ぐ山の高さ……………竹中信常……（三四）



身と命と財とを捨つ

佐藤 密雄

われ撰受正法（しょうじゅしょうぼう）において身命財（しんみょうさい）をすてて、正法（しょうぼう）を護持（ごじ）せん―勝まん経

これは信仰をまもるためには、身体も命も財産も捨てるというはげしい決心のほどを示した言葉である。維摩経（ゆいまぎょう）にも同じ言葉があるが、いまは勝鬘経（しょうまんぎょう）に述べられてる经文（きょうもん）を記したのである。このはげしい決心のほどを述べているのは、釈尊の前に坐っている若き夫人しょうまん（勝鬘）である。しょうまん夫人は阿踰闍国（あゆじゃこく）の勇称王（ゆうしょうおう）の夫人で、出身は舍衛国（しゃえいこく）の波斯匿王（はしのくおう）と末利夫人（まりぶにん）との娘であった。勝鬘経はしょうまん夫人が釈尊の前で自分の信仰を述べ、釈尊がその信仰の正しいことをみとめ、また讃嘆（さんだん）される経であって、若い女性が

全経の主役になっていることや、また彼の維摩経の維摩居士（ゆいまこじ）が在家の男性であるが、これとならんで、此は同じ女性が仏教の道理を説いていることで有名な経である。更にまた日本の仏教の始祖（しそ）ともいうべき聖徳太子がこの経をば、時の女帝の推古天皇（すいこてんのう）に講義され、またその註釈（ちゅうしゃく）を作られて、これが日本最初の御前講義であり、また日本人が初めて著した書物であったことでも知られている。

さて、この経の主人公であるしょうまん夫人が仏教を信ずるに至ったのは、両親の導（みちびき）であった。波斯匿王と末利夫人が、釈尊から仏教をきき、信仰を得た喜びを娘にもわけ与えようと、釈尊の徳をたたえた手紙をしょうまん夫人に送ったのである。しょうまん夫人は両親の手紙から仏教の信仰に入り、釈尊の徳をたたえることになるが、そのしょうまん夫人の徳をたたえるころのしんけんさに答えて、釈尊が弟子達と夫人のいるところへ現われ

給うたのが、この勝鬘經が説き出される会座（えざ）すなわちこの經成立の場であつた。従つてこの勝まん經で、しょうまん夫人がその信仰を述べる場所は阿踰闍国の宮殿である。そして、教法（きょうぼう）を説くのはしょうまん夫人で、その夫人の後見（こうけん）をされるのが釈尊であり、きき手は夫人の侍女達と釈尊の弟子達とであつた。しょうまん夫人が釈尊の徳をたたえた言葉は長いが、その中に

「如来（にょらい）の妙色身（みょうしきしん）は世間に等しきものなし、無比（むび）にしてふしぎなり。このゆえに、敬礼（きょうらい）しまつる。如来の色（しき）は無尽（むじん）なり。ちえもまた然り。一切法に常住（じょうじゅう）したまう。このゆえに帰依（きえ）したてまつる云云」

という言葉がある。これは如来歎徳文（にょらいたんどくもん）といわれて、現在でも日本の各宗の僧が読經（どきょう）する時に、必ず仏をたたえる文として読み上げてゐるものでもある。釈尊は、信仰のない人から見ると、人なみの身体と、八十才の寿命の人としか見えないが、一度び信仰を得たものが心眼によってこれを感じ得（かんとく）すると、身体は全世界をつつむ法体（ほつたい）である

し、精神は世界のすべてを生かす道理（どうり）すなわち一切法（いっさいほう）を供えた方であると感ぜられるのであつて、そのことを述べたのがこの歎徳文である。

二

しょうまん夫人の釈尊をたたえる言葉は、まことに信仰を得たもののみが現わし得るまごころにみちていたのであろう。釈尊はそれを見て、

「汝、如来の眞実の功徳を歎じぬ。此の善根を以て、当に無量阿僧祇劫（むりょうあそうぎこう）に於いて天人の中に自在王（じざいおう）となり、……また無量阿僧祇劫に仏を供養し、二万阿僧祇劫を過ぎて当に作仏して普光如来（ふこうにょらい）と号すべし。彼の仏の国土（こくど）には諸の悪趣・老病・衰惱・不適意（ふちやくい）の苦なく、……色力・寿命・五欲の衆具悉く快樂にして……彼の国に生んと願ふは……皆まさに往生（おうじょう）すべし。」

と述べられた。このように、釈尊から信者が将来の大成について予言を受けることを受記（じゅき）というが、いま釈尊がしょうまん夫人に与えられたのは、彼女のその信仰心を育てて行くならば、やがて彼女は普光如来（ふこうにょらい）と言う仏になると受記されたのである。しょうま

ん夫人は、この受記に歓喜（かんぎ）したのであるが、そのよろこびには、然しこれからの長い仏道（ぶつどう）をへて行かねばならぬのであって、釈尊の受記にこたえてしようまん夫人が普光如来となるには、強い決心をもたねばならない。仏道（ぶつどう）はきびしいのであって、坐して待つものではないのである。受記の言葉に、「無量阿僧祇劫に於て天人の中に於て自在王となる」とあるが、これは、文字通りには数え難い程の長い期間を、天上の世界で大帝王となると言うのであって、人間的幸福としては至上のものであるが、天上の幸福な生活は仏道を忘れさすものとされる。長い幸福の生活の中で仏道を忘れないことは極めてむづかしいことで大きな努力を要するのである。次に「また無量阿僧祇劫に仏に供養し」とあるのは前と同様の期間を仏に供養して信仰を育てるのであって、これは喜ばしき生活の中に仏道をすすめるが、然しここまでで、すでに人間的に永遠に近い長期間である。如来となるにはこの上さらに「二万阿僧祇劫を過ぎて」とある。これも亦た人間の考え方では永遠に近い程の期間であるが勿論この長期間も信仰を増し育てることを忘れずにつづけるのである。永遠の生命に生きた仏である釈尊の立場からは、それは極めて短時間なのであるが、人間であるしようまん夫人にと

っては、受記を頂いた普光如来となるには、このような永遠以上の長い間を信仰の根を枯さず育て上げねばならないことになるのである。従って、何んとしても、この長期間にわたって仏道を失うことなく信仰をみのらせるには常念不忘（じょうねんふぼう）の強い決心が必要なのである。そこで夫人は初めに記したようなはげしい言葉で、身命財を捨てても、正法に生きることと決心し、釈尊の受記にこたえ、いまのこの信仰の根を育てみのらせたいと願ったのである。

三

しようまん夫人は、普光如来となる受記を受けたので、その仏となるまでの長い間を、信仰を失わず育てるために十大受と呼ぶ十箇の生活信条をたてた。受とは誓（ちかい）のことである。聖徳太子はこのしようまん夫人の十箇の信条を解釈されるときに、この十の中の初め五つを摂律儀戒（しょうりつきかい）と名づけられたが、摂律儀戒とは自身を節制（せっせい）することである。その五つとは

(一) 所受の戒（かい）に於て犯心（ぼんしん）を起さない。

- (二) 諸の尊長に於て慢心（まんしん）を起さない。
- (三) 諸の衆生（しゅじょう）に於て恚心（いしん）を

起さない。

四 他の色心（しきしん）及び外（げ）の衆具（しゅうぐ）に於て嫉心（しっしん）を起さない。

五 内外の法に於て慳心（けんしん）を起さない。

である。六の「所受の戒」とは守るべき規則律制であるが、それを守って破らないのが「犯心を起さない」である。七は目上のものに謙虚（けんきょ）であることを言うのであつて、自分の勝手の考えを他人よりすぐれているとするのが慢心であるが、これを起してはならないと言うのである。八は、悲心（いしん）は他人を害し損を与える心のことで、これをいましめるものである。九の「嫉心を起さない」はねたみごころを起さないことであるが、いまは「他人の身色や外の衆具」について起してはならないとする。先づ身色とは容姿（ようし）のことであるし、外の衆具とは持ちものや装身具（そうしんぐ）のことであつて、そのようなものにねたみの心を起してはいけないというのである。十の慳心（けんしん）は、「もののおしみ」することであるが、人は自分の持ち物も、ときには自分の簡単な思いつきでさえ人に与えたがらない。然し社会生活は自分一人が生きてないことを知るならば、生かされる自分すべては社会にささげねばならないのであつて、「もののお

しみ」こそ、社会生活に反するものであることをいっているのである。

聖徳太子は、つづいて第六から第九迄の四大受を撰衆生戒（せつしゅじょうかい）と解釈された。撰衆生とは「社会民衆のためにつくす」の意味であつて、自分の生活の一つ一つが社会に役立つように生きねばならないと戒（いましめ）ているのである。四大受とは、要点を上げると

六 みづから己れの為に財物を受蓄（じゅちく）せじ。

七 みづから己れの為に四摂法（ししゅうぼう）を行ぜじ。

八 孤独乃至困苦の衆生を見んに終にしばらくも捨せず。

九 悪律儀（あくりつぎ）と及び諸の犯戒（はんか）（い）を見てはついに棄捨せず。

である。この中の意味は自分のために財産をつくり、ものを蓄えることをしないのであつて、経には、これについて「もし得るところがあれば貧苦の人々を救う」べきことを述べているから、蓄財（ちくざい）は自分のためではなく「社会のために」なすべしと言うのである。十の四摂法は、布施（ふせ）と愛語（あいご）と利行（りぎょう）と同事（どうじ）であつて、これは、仏教徒の四つの心得こ

とともにいうべきもの、布施は自分の財でも知識でもおしみなく他に与えること、愛語は文字通り他人には愛情ある言葉で接すること、利行は他人に役立つように行いをするのと、最後に同事とは他人と悲しみも喜びも共にすることであるが、このような四つの行いは人として是非行なわねばならぬのであるが、然しそれを自分の名誉や利益を考えてせず、自分のためにこだわることなき（無罣碍—むけえげ）の心でなさねばならぬのである。（四）は社会には数多くの困った人があるが、それらを絶対に見すててはならないと言うのであって、単に同情にとどまらずに、自分に来る限りのことをなしつつけて人をその苦から脱れさせるまで努力して助けをなすべしとするのである。（五）の悪律儀とは悪いことを職業とする人のことで、今日で言えば法律の禁じていることを職業とするもの、犯戒は法律や道徳に反することをなすものをいうのであるが、このような人を見た時に、これらの人を避けることなく、また途中で見捨てることなく、それを止めるまで説得（せつとく）し導いて正業正道につかせねばならないとするのであって、すなわち他人の悪事を見過すことはいけなとするのである。

十大受の第十については、聖徳太子はこれを撰善法戒（しょうぜんぼうかい）と解釈されている。「凡そよいこ

キリスト教の伝道師

石原 宥 政

玄関で雑巾がけをしていると一人の男が入ってきた。三十五六の色の生白い中肉中背であるが、右手に杖をもっていた。

私は外交員だナと思ったが、案に相違して、

「私どもは手わけをして、一軒一軒お伺いし、キリスト教のお話をしているものです」

との前口上であった。私は内心うんざりしたが、さりとて追いつ返すわけにもゆかず、雑巾を片手に持ったまま、中途半端なかたちで立っていた。歓迎されない態度には慣れているとばかりに、相手は独りじめして更に説教を続けるのであった。本当の神はキリストであり、仏教の如き偶像崇拜はやめるべきだと昔の活動弁士を思わせるような

口調で、まくしたてた。

「ネおじさん、人間は誰でも死ぬですよ。人生なんて泡のようには短く、死んでからは、必ず神の審判をうけるのです。本当の神は木や石で作られたものではありません。人類のために十字架にかけられた神のひとり子、イエスキリストこそ本当の神です。この証拠には彼は死んでから復活し、生身のまま天に昇られました」

キリスト教の布教師を相手に、私の気持を申し立てるものもつまらないと思ったが、これだけのことを答えた。

「木彫の仏像ではありません。この仏像が口をきいたり、力を与えたりするものでありません。これはシンボルです。お釈

とは何んでもするが悪いことはどんなことでもしない」というのが摂善法戒であるが、いま第十の大受には

(十) 正法を摂受して忘失せじ。

とある。正法とは仏教の教えであるが、いましょうまん夫人にとって正法とは、釈尊の受記を信じて、いまの釈尊への信を失わないことである。勝鬘經は、如来藏（によらいぞう）を正法とする經であるが、如来藏とは人間の心の本性（ほんしょう）のことで、しょうまん夫人の場合は、この本性が信となったのであって、その本性が如来になるのである。そして、この本性が如来となるには、しょうまん夫人の仕方としては、そのことを堅く信じて、上に述べた九つの大受を怠らずつとめねばならないとするのである。

四

さて、しょうまん夫人の、「身命財を捨つ」という堅い決心は、実はいま述べたこの十大受をば、我が心が如来心になるまでの間を、怠らず精進（しょうじん）して行きたいとし、たゆまず続けようとすこゝのためになされたのである。この決心の内容を、いま少しく詳しく述べると、經には「この実願を以て無量無辺の衆生を安慰せん」と言う文で始められて

「此の善根を以て、一切の生に於て正智を得ん、是を第

迦さまの説かれたのは法であり宇宙の真理なのです。しかし人間は愚かですから、眼で見ることのできるシンボルが必要なのです。キリスト教でも十字架を飾ったり、マリヤ像を拝んだりするのでしょう。キリストは独身でしたがお釈迦さまは結婚しラゴラという子息までありました。この点私はお釈迦さまの方が偉いと思うのです。

私どもは罪深いからこそ仏さまや浄土が必要なのです。自分で悟れる程に私が立派なら神も仏もいらないうしょう。お經にはお浄土のことを金・銀・ルリ・メノウでできているとありますが、私は本当に有難いと思っています。

人間は一分はおろか、一秒間たりといえども、地上から離れられません。こうした日常の生活の中であって、その仕事や職業がなんであろうとも、自分の

信じている教えに従って生きてゆくより外はありません。私ならば毎日お念仏を唱えて生活してゆくところに、安心した暮しができるのです。」

相手の男は、聖書の言葉をいくつか引用したチラシをおいて帰って行った。

ほんとをいうと、こうしたキリスト教伝道師が、いつかは私の家にも来ることを知っていたなぜならここ数日前から近所を彼等の一団が手わけをして廻っていたことを知っていたからである。いかにも伝道師特有の口調を以て奥さん方を相手にまくしたてていた。しかし実際に彼等に会ってみると、独りよがりの教義をまくしたてるにしても、その熱心さ、その積極さには内心感心させられるものがあった。それは彼等はそれなりに独特の自信があり、信念に燃えているからだ思った。

一の大願となづく。我れ正法智を得て、無厭心を以て衆生のために説かん。是を第二の大願と名づく、我れ摂受正法において身と命と財を捨てて正法を護持せん。是を第三の大願と名づく。」

とある。これを勝鬘經の三大願（さんだいがん）とも名づける。いま述べたようにこの三大願が「無量無辺（むりょうむへん）の衆生を安慰（あんゐ）せん」という前文を持つてゐることから知れるように、しょうまん夫人が如来となる大目的も、限らない人々を安心させ仏教に生きさせるためのもの、利他（りた）のためにこれを努めるのである。そして、第一の大願に「一切生に於て正法智（しょうほうち）を得ん」とあるが、如来となるまでの間を、上に述べた十大受を行ずることと身心に體驗されるのが正法智である。智といってもこれは人間の眞の本性である如来蔵が、次第に自覺されていくのを言うのである。第二の大願に「無厭心を以て」とあるのは、うむことなく、たゆむことなく、自身の體驗のすすむままに、すなわち正法智の得られるままに、これを人々に説けというのである。そして第三の大願に、第一、第二の大願を実現するために、そのことは言うまでもなく先に述べた十大受を実行しつづけることによって実現するのであるが、そのことのために身と

命と財を捨てると言うのである。「正法を護持（ごじ）せん」とあるのは、文字の上からは仏教をまもる意味である。然しこれは勿論いままでも述べた十大受の三大願による実現であつて、それによつて自分自身に実行し體驗し、自分が如来となる仕方で「正法を護持しよう」といったのである。

女性を主人公としたこの勝まん經に、「身命財を捨て」というのはげしい表現のあることは意外な感じを与へる。世間では身も命も財も、これを護るために人は働き生きているのであつて、一般人に取つてはこれこそ最高のものである。ところが、しょうまん夫人は、仏教に入つて、この最高のものを捨てても護持せねばならぬものを発見したのである。それは、人間の本性であつたのである。この本性が開かないから人々は我が一個の身心の爲めに身命財を惜しむのである。然ししょうまん夫人は仏によつてその心の本性を開かれた。いま、しょうまん夫人はこの本性はすべてのものを幸福にする如来力を実現し満足するものであることを知つたのである。然しそれへ進むには、一大決心をせねばならない。女性のしょうまんがなした身命財を捨てる覺悟がはたして私共にあるか、仏教を信ずることは、なまやさしいことではない。ぎりぎりの、さしせまつたきびしさから如来に続く信心は生れる出る。（文学博士）

▼扉の御法語▲

凡は後学畏べしと云て、学生はかならずしも、先達なればということはないなり。かの如来滅後五百年に、五百の羅漢あつまりて、婆沙論をつくりしに、九百年に世親いでて、俱舍論をつくりて、さきの義を破し給き、義の是非を論ぜんことは、あながちに、上古にもおそるまじきものぞ（勅修御伝第五）

学生（がくしょう）とは仏道を学習する人のことですが、ここでは広く学者といってもよい言葉であります。

大概の場合、後進の者こそ畏るべきものがある、学者は必ずしも先輩の学説だから尊ぶということはありません。釈尊の滅後五百年に結集が行われ、有部宗正依の論である婆沙論二百巻をつくったが、滅後九百年には世親がでて、俱舍論三十巻をつくり、それまでの教説を論破されています。従って教義の是非を論ずるに当って、強いて古い学説だからだといっておそれはいけません。

この無暗やたらに先人の説だからとおそれ憚ってはならぬと強く戒められている点が、大勇猛心の上人が偉大な宗教改革者の一人とされるゆえんであります。

このご法語の前において、上人は弘法大師の十住心論を論難されています。十住心論において法相、三論、天台、華嚴の各宗義を浅劣なものとし、真言を最上のものとしていますが、他宗義を自宗義と異なるからといって浅劣と定めることはよくないということです。各宗にはそれぞれの特徴があるので、自宗の教義と異なるのは当然であります。上人はこのように申されてから、ある時の夢物語に托して自分の考えは弘法大師の御意にかなっていると説明されています。

弘法大師の十住心論を善無畏の説を引用して論破しながら、実はこれこそ弘法大師の真意なりとされている点は重大であります。上人の解釈が大師の真意と同じだということに大きな発展があります。

またこのご法語の後には「上人智慧第一のはまれちまたにみち、多聞広学のきこえ世にあまねく。おほよそ我朝にわたれる聖教伝記

眼にあてずということなし」と記されています。上人はこれ程の大学者でした。それなればこそ、他宗の教義を徒らに浅劣ときめこむことを戒められました。上人は各宗の教説に明るく、これを是認しながら、浄土宗をおたてになりました。その目的は「凡夫の報土にむまるることを、しめさんがため」でありました。しかも浄土宗は諸宗に優れていると断じ、その理由を「念仏一行の、諸行にすぐれたりという事は、万機を撰するかたをいうなり」とお示しになっていました。こうした上人なればこそ古来の諸学者を畏れてはいけぬといい得たのであって、このご法語は先輩を軽んじたり、先輩の粗探しをするものでないであります。学問する者は、以前のものをのり越して、新しい天地に自己を發展させるべく常に努力すべきことを教えられたものであります。

上人が弘法大師の真意を探ったように、真剣に先人の学説を味得ることができたならば、実はそれは創られたる新天地となり得るのではありますまいか。上人の後学畏るべしのご期待にそいたいものであります。



微笑続ける上人御像

鈴木 成 元

会津といえは磐梯山というように、会津地方の立役者は磐梯山である。

会津磐梯山に振り袖着せて

奈良の大仏聲に取る

というのは、磐梯山の雄大さもさることながら、七色に変わる磐梯山の美しい変化を歌ったものである。朝霧から晴れる磐梯山、夕暮れせまる磐梯山は誠にすばらしい。美しいというよりも神秘的といった方がよいかもしれない。そのために昔から崇敬され、自然崇拜の対象ともなってきたのである。

何事も同じであるが、物事は全て条件が揃わなければならない。戦時中から流行した言葉であるが、「健全なる精神は健全なる身体に宿る」という。しかしこんな馬鹿なことはありようはすがない。それを成立させるには

「健全なる社会で」という条件がなければならぬ。

天正十年（一五八二）三月、佐々木次郎をかくまった理由で塩山（山梨県）の恵林寺は織田信忠にかこまれ、快川和尚以下寺中のものが三門の楼上に押し込められ、下にかれ草を積んで火をかけられた。紅蓮の炎の中で老若の僧や若い稚児衆がもたえ苦しむわめきたてたが、快川和尚は不動明王のように坐って「心頭を滅却すれば火もおのずから涼し」といったという。この句は快川和尚の句ではなく、中国の「碧巖録」に出てくる朴菴鵬の句であるが、この句の意味は「滅却すれば」という条件つきなのである。滅却しなかったならば暑いに相違ない。いや生きていて滅却することは現実では不可能であろう。

奥の細道で芭蕉と其角が松島に行ったとき、「ああ松島や」といったきりで、あまりの美しさに句が出来なかった話は有名である。

松島をおとずれた人は多いと思うが、「名物にうまいものなし」といった気持で帰る人々が多数あることと思う。まして海岸の近くに住む人はなおさらのことである。それにしても落胆して帰る人々の多くは昼の松島を見た人々であろう。オゾンが沢山含んだ海風に身を向けながら、だんだんと明るむ海原にほのほのと島が浮かび、朝日がぼっと顔を出す頃の松島は全く形容のない美しさである。雨にかすむ夕暮の松島もまたそれとは別の趣がある。芭蕉が見たのはおそらくこのような条件のもとにあった松島の光景であろう。

それはそれとして、民謡の流行とともに会津地方はかなり有名になった。それに近頃は裏磐梯とかスカイラインとか大分観光的にも宣伝しているため、白虎隊までが再びブームに乗った感じである。

会津地方の中心地である若松市内の盛道山高巖寺は、もと末寺三十カ寺をもっていた中本山格の寺であった。寺伝によれば、福田無

量寺に住んでいた炭伝が、どんな風の吹きまわしかその地を立ち去り、この若松にやって来て草庵を作り、念仏三昧にふけて歳月を送った。そこに弟子の炭天が尋ねて来て、文明六年（一四七四）この寺を建立した。大永二年（一五二二）黒川城（鶴ヶ城）の城主であった芦名盛舜は父盛高の位牌を高巖寺に納めて菩提所として、寺領を寄進した。これ以後高巖寺では成道山という山号を改め、芦名氏の盛をもらって盛道山というようになった。

天正十七年（一五八九）芦名氏の滅亡とともに寺の財産もなくなったが、寛永四年（一六二七）蒲生忠卿を当寺に葬むり影堂を建てて復興し、加藤氏以来の寺領百石を寄進された。

高巖寺には珍らしい法然上人の木像がある。寺伝によれば、奥州の藤原秀衡は深く法然に帰依しており是非とも会いたいと思っていた。しかし奥州平泉と京都の距離はあまりにも遠いので簡単に会いに行くこともできない。そこで法然上人の真像を彫刻させ遙かに拝みたいと願い出た。そこで法然上人は鏡

に向って仏師に自分の像を彫刻させて奥州に持たせてやった。像を背負った人が会津の神指村まで来ると、にわかに像が重くなって進むことがでなくなった。しかたなくそこに



（高巖寺に安置されている上人木像）

その後ずっと時代は下るが、京都知恩寺から炭天が来て高巖寺に住み附近一帯を教化したのであるが、そのとき来迎院の荒廃を悲しみ、法然上人の像を高巖寺に安置したという。それ以後現在までに至っている。

神指村はこの高巖寺から西方四キロ弱のところにある村であるが、そこには今でも法然原という地名が残っている。そしてここに来迎院があったことはいうまでもない。それにしてもこの法然上人の木像は、秀衡の懇請によつて法然上人が鏡に向いながら彫刻師に刻ませた像ではないであろう。もし秀衡が注文したものならばわざわざ遠まわりして会津なを通る必要もないし、またたとえこの道を通つたとしても、こんなところに木像がとどまるはずもない。秀衡は文治三年（一一八七）十月二十九日に死ぬのであるが、よしんば秀衡が死んでも泰衡がいるはずである。父の志は遂げられるべきである。そうでないために秀衡懇請の物語ができ、神指村から動かなくなった物語ができてくるのである。

しかしそんなことはどうでもよい。私の不思議に思うことは、浄土宗ではどうして法然上人の像が少ないのか、ということである。その少ない中の一つが現にこの高巖寺にあるので、狐にばかされたような感じである。法然上人の木像は奈良の当麻寺（奥院）にもある。しかしこの木像は法然上人だといわ

ればなるほどと思うが、絵巻などに描かれている絵と比較すると、あまり似ているとは思われない。しかし何となく大らかな感じで法然上人の徳を表わしている御像ではある。

この像が鎌倉時代のもものと断言することは危険ではあるが、私のような素人がみても室町時代は下らないものであろう。

これに対し、高巖寺の木像は、形は当麻寺のものとはよく似ている座像であるが、当麻寺のよりも二十歳ぐらい若々しい感じがする。典型的な法然頭といい、広い額に肉づきのよい鼻筋、どことなく笑みを含んだ目と口は、誰しもが抱いている法然上人と全く同じである。手の様子が不自然に見えるが、これは珠子がないためで、最初は莊嚴珠子を持っていたのだろう。ただこの木像で気になるのは、衣の襟が三角に高くなっていることである。浄土宗の衣にいつから三角襟がなくなったのかはつきりしないが、「四十八巻伝」などに

木像は一本の木で造られたものであるが、首はとりはずしができるようになっている。そして胴体の内部は空洞になっている。その中には何も入っていないが、昔は何か入っていたものであろう。それはともかく。等身大より心持ち大きめの木像に接すると、七百年過ぎた今日ではあるが、我々に暖くそつとささやきながら善行を導びく感じを与え

の途すがら、一般の人々にも拝ませたことはいうまでもない。そうすると、会津若松からいずれは奥州街道に出て江戸に上ったのであろうが、この奥州街道に出るまでの道順がわからない。若松から山越えをして白河や那須日光に出るか、あるいは今の猪苗代湖岸を通って郡山に出るか、二つである。しかし途中で宣伝をしながら上京する道筋としては、全体からすればいくらか遠いけれども、早く奥州街道に出ることができ、しかも人家の多い街道を通過できる郡山に出た方が効果的である。奥州街道筋には浄土宗の寺院も多いことであり、おそらくこの道を選んだことであらう。

もない。

浄土宗の衣にいつから三角襟がなくなったのかはつきりしないが、「四十八巻伝」などに

この法然像は宝暦四年（一七五四）閏二月

正月二十五日に高巖寺で法然上人の御忌を

朔日から六月朔日までの満五カ月、江戸本所の回向院で御開帳したことがある。閏二月といえ

すまし、すぐ上京の支度に取りかかったのだらう。何といっても雪国の会津のことである。二月といえ

はつきりとしている。三角襟は天台の様式であり、鎌倉の末頃までは浄土宗の一部にもこの風習が残っていたのではあるまいか。この像にはそのような古い様式が残っているの

である。もつとも古い様式が残っているから、

を後

着くには二十日ぐらいはかかったであろう。こうして残雪を仰ぎながら若松を出た法然上人木像は、賑やかな春爛漫の花の都江戸に着いたわけである。いくら連日信者が押しかけたとはいえ、御影堂の中に安置されていた法然像にとっては、「絶景かな」の連発であったに相違ない。京都から会津への旅、会津から江戸への旅と、なかなか旅行好きの法然上人木像である。

七種類の妻

世の中には七種類の妻がある。第一には人殺しのような妻、第二には盗人のような妻、第三には主人のような妻、第四には母のような妻、第五には妹のような妻、第六には友人のような妻、第七には下婢のような妻。

汚れた心を持ち、夫に対して愛がなく、夫を軽んじ、他の男に心をうばわれて、夫を殺させてやるとする。これが人殺のような妻という。夫の事業を理解せず、その得てきた富を浪費し盗まんとするものがある。これが盗人のような妻である。口腹の欲に走り、言葉荒れ、夫を虐げる者がある。これは主人のよう

しかしその後会津に帰った法然像は、どっかと腰を落ちつけて何処にも出なかった。そして段々忘れられてしまった。この秀れた法然像を知っている人は、地元の人とはまったくして、ほとんどないといってよいだろう。会津白虎隊で有名な戊辰戦争のとき、市内の人々は皆地方に避難した。しかし戦争が落ちついたので自宅の様子を見に帰った総代の佐原惣右衛門さんが寺に寄ってみたところ、

な妻である。夫を愛し、母の子に対する如く擁護し、その富を大切にしている者がある。これは母のような妻である。夫に誠実をもって仕え、妹姉の心、骨肉の情をもって対する者が

ある。これは妹のような妻である。夫を見ること、あだかも親しい友の如く、貞淑にして行い正しく、夫を敬う者がある。これは友の

ような妻である。夫に罵られ、よしんば打た

れ、怒ることなき

者がある。これは下婢のような妻である。

さて前の三種類は、善い報いのある筈もな

い。後の四種類は人

の性質によって異なるが

互に満足してこそ幸いな一生がおくれる。

官軍が高巖寺に入っており、暖を取るために手当り次第その辺を壊して焚火をしていた。みると法然像まで持ち出されてある。驚いた惣右衛門さんは、おそろおそろ兵隊に、「私はこの寺の総代である。どうかその木像は私にいただきたい。」といって願ひ出た。許可を得た惣右衛門さんは店の若い人にかつがせて避難先まで持ち運んだ。その後宗祖堂を建てて安置したという。まさにかけがえのない人であった。毎年行方御忌のとき、この木像は宗祖堂から本堂に安置されるのであるが、そのときには佐原家の当主が来て先達をするこ

とになっている。

去年は元祖法然上人の七百五十年の御忌が各地で催された。しかし木像を安置して法要をつとめた話はきかない。いや法然上人の木像はいくつもないのであるから、したくとも

出来ないのである。私自身会津の高巖寺にこのような立派な木像があるとは夢にも

知らなかった。

この像があることを多くの人々が知ってい

たならば、必ずや五十年に一回の御忌に旅行

出来たことは疑がない。

行住坐臥の教え

北出立仙

いつでもどこでもみ仏と離れないという、信仰ほどこの世に尊いものはないであろう。

君子は独りを慎しむという論語の言葉も、この消息を語ったのであろう。宗祖上人は一生の自己修練のはて、觀念の念仏より十声の念仏へとほんとうの大慈のみ仏の救いにふれて、初めて行住坐臥の教である他力の念仏を世の人々にうったえられたのである。

入る息出づる息の中に、念死念仏の信心を強調された二祖聖光房弁長上人も元祖さまの御心がうけとれての確信であらう。

入る息出づる息にはマッタもないし、又一点の自己のはからいもないはずである。この関所を平常心でパスしたいばかりに人間社会のいとなみがなされているのである。人生の行路は万人万様ではあるが、しかし行住坐臥の教のルールにのりこまねばどうしても、安心して渡りきることの出来ぬ多難多苦の道である。

最近の一流新聞に当代の一流女流評論家が四十の坂をこした女性が今日までに二度の結婚に失敗し、今又この女性が同職場に於て二十も年下の男性と恋愛し、一緒になれば十年もせずして破鏡の運命にたちいるだろう。この場から逃れるのがいいか、この道をすすむべきか、教を乞うとの相談に対して十年先の破鏡を考える前に、今のその幸福を味うべく結婚にふみきることがいいでしょうと、現代人のすべてとまでいいたいほどの現実主義者にもってこいの返事を送っている。時代はここまで来ているのである。

現代ほどわかりきったことがわからず、邪悪が白昼堂々と行われ而もこれに対して社会人はそっぽをむき正義のために抗議を申込むの勇気をかき、暴力まかり通る世相はない。

この生活にだれでもが満足していない。何とかしてこの狂った毎日の生活に終止符をうって安堵安心の日暮しがしたいと念願している事も亦自明の事実である。

この苦悩多き今の生活より脱するの道は、もう一度お互に、真剣に取ることのみを考える生活、進むことのみを考える生活、勝つこ

とのみを考える生活に対して虚心坦懐に反省の生活に心を遊ばし、静かに心のササヤキに耳を傾けるだけの心のゆとり即ち天来の声を聞くだけの自己忘失のまちがった自己を発見するということが最も大切だと思う。

今日の時代ほど法然上人の一生を通じて後の世の人のために釈尊出世の本懐とまでいわれた行住坐臥の教即ち口に称える念仏をお互の生活のよりどころとして狂わず酔わずうろたえず屁古垂れない生活の出来るように念仏の再認識をすることが最も大切であらう。

現代人はすべからくこのよき人の仰せを信じて先づ南無阿彌陀仏と唱えることが大切である。かかる行者が村に町にみちてこそ、この世を万人が求めて止まぬ住みよい世界にすることが出来るのである。

念仏の声の前には敵も味方もなく勝者も敗者もなく四海平等共にみ仏に抱かるる安らぎを享受することが出来、永い間迷い出ていた煩惱のきずなを仏心の醒めによって断ちきり永遠の生命に帰趣するこの世の大福長者のよろこびを満足する果報者となることができるのである。

紙の写 表真



観音菩薩像、銅造像
高八七糎奈良法隆寺

理想が現実へ

ある会社の社長となった人の話であるが、還暦だか何かのお祝いに、部長以下の人々が集って胸像を作ることになった。何月かの日々をついやして胸像は出来上った。そこで代表者が社長宅に持っていった。そしてその胸像をかざってお祝をしたという。けれどもこの胸像は一、二日して蔵の中に入れられ、二度と日の目を見ることがなかった。

私も伝え聞いた話であり、この胸像がよく出来たものかどうかはわからないが、蔵の中にしまわれた最も大きな理由は奥さんの発言が物をいったらしい。ということは、ブロンズの胸像であるため、真黒であったということである。つまり「私の主人はこんなに黒くない」ということらしい。もっともな話である。奥さんには奥さんのイメージがあるはずである。そのイメージとあまりにも違っていたこの胸像は、暗い蔵の中で塵とともに過ぎなければならぬ運命になったのである。物には全てそれぞれの美しさがあるはずで

ある。木像には木像の美しさがあり銅像には銅像の美しさがあるのである。そしてその美しさを求める人間の気持はいつまでたっても変りはないけれども、美しさそのものの内容は変わってくるのである。

法隆寺には多くの仏像がある。そして同じ観音菩薩像にも、百済観音もあり救世観音もあるが、この夢違観音は私のもっとも好きなものである。夢は朝方にみるとか、夢をみている時間はほんの数秒であるとか、健康な人は夢をみないとか、夢に関する話はさまざまであるが、そんな理窟はぬきにしても夢ほど我々の生活と結びついているものはない。嫌やな夢をみたあとはたしかに気持が悪い。世間ではよくさか夢などといっているけれども、それは不愉快さを無理に打ち消そうと努めているに過ぎないものであり、注意力をそぐ結果になるだけである。

この観音菩薩像がどうして、また何時頃から夢違観音といわれたのかわからないけれど

も、江戸時代以前からいわれていたことは事実である。顔のまんなかで髪が生えぎわに切り込みをつけ、左右にそれを荒い筋彫りで現したところは、ちょうど子供のオカッパ姿を連想させ、眉から鼻にのびる美しい線と、それを受けているほほえんだ口元、ふっくらとした頬に細長く切れた目は全くよく調和しており、けがれのない童顔といったところである。いやそれをさらに理想化して行ったのがこの像の顔であろう。すんなりとした撫肩と何処となくみずみずしい肉どりは、奈良時代の前期白鳳時代の特色でもあるが、ブロンズ製ということが、さらにそれを助けているといえるであろう。どんなに悪い夢をみよう、と、またどんなに怒っていると、この像の前にたたずめば、自然と落ち着きを取りもどすことであろう。何処か人間らしい心やすさと親しさをもち、何処となく人間らしくない清楚な可憐さをもっているところにこの像の特色があり、それが自然と全ての人の心の中に刻みこまれて行き、いつのまにか悪夢を吉夢に変えて行く信仰になって行ったのである。

まんじ まんだん

上村真肇



浅草で生れた私は、子供の時、観音堂の破風（はふ）の大きな円卍（まるまんじ）をふり仰いで、一体あれは何のしるしであろうかと思つたことがあります。其後成長して旅行などすると、どこのお寺にも見られるし、又文章で雪のことをまんじともえと形容したり、種々の模様にも色々使われていたり、或は、谷崎さんの小説の題名にも出て来るし、禪の卍山和尚とか、卍藏経とか、まんじの使用例は頗る広く、第二次世界大戦でドイツのナチの旗など、ひるがえっている映画の場面など見ると、私なりに、兎も角まんじを理解して置く必要があると感じて、まんじりともせず内外の關係文献を読みあさつたこともあるのでした。

すると「まんじ」は、何も、浅草観音堂だ

けで使っているのでなしに、殆ど、世界的に分布して、広く見られる記号であつて、特に仏教に於て使用される意味には、やはり、仏教にふさわしい特色があると云うことも呑みこめて参りました。ところで浅草の観音様には先程申上げた大屋根のまんじのみでなく、御存じのように、大提燈や小型さいせん箱、其他にまんじが多く使用されて居ります。近頃特にふえた観光の外人達の質問の中には、時々、あのスワスチカ（まんじ）はどういう意味かと言つたおたずねがあります。そうした場合、あれは仏教では、福德吉祥の意味でナチのマークではありませんと申すにやつと笑うのが常であります。これで驚いたことがあります。昭和二十年の三月十日に旧大本堂が焼け、其直後、仮堂も無い頃でしたの

で、境内の淡島堂が一時本堂の代りになつたことがあります。丁度その頃、司令部から軍人（佐官級の人）が二世の通訳をつれて調査に来たのですが、その淡島堂の壁は、相当目立つ、大きなまんじ散らしの模様でありましたので、先方は驚いた様子で、この場所は、ナチと關係があるのかと言うのです。そこで私がせんそうじ（浅草寺）は、ナチと關係はありません。と申すと、その二世の人は、何を勘違いしたのか、ナチとせんそうを關係づけたのかも知れませんが、鋭い目付になつて私をにらむのです。何しろ、終戦直後、まだ鬼畜米英が頭から抜け切らぬ折でしたから、こちらは少からずまごつてぞつとした次第です。その時に「まんじ」に就ての少しばかりの知識が役に立つたのです。わかり易く、説明してあげたので、戦争寺（せんそうじ）は、ナチと特別の關係なしと判明して、帰つて行きました。其後、宗教家のバーンズ氏やウッダード氏（今の国際宗教研究所長）など来寺されましたが、もうその頃には、そんな馬鹿げたことはありませんでした。

ヒトラーが、旗じるしに使用したのは、赤

地白丸の中に、黒の斜型逆（さか）まんじでたしかに、ゲルマン民族の伝承する「まんじ」から来ているまんじの一種なのですが、ヒトラーのは、ハーケンクロイツで、ユダヤ

人排斥の意味を含めた新興ドイツの国旗として使用したのですから、仏教で使用するまんじの意味とは全く違うわけであります。ところで、仏教の「まんじ」と申しても、仏教で「まんじ」を創作したのではなく、古代のインドにあって、アリアン人が用いたスワスチカ記号を、仏教徒が使用したまでで、インドでは神聖で目出度い意味に用いられていたようであります。特に、インドラの化身とされている牝牛の耳に「まんじ」印を焼付けて吉兆としたり、刻文の首尾、金属板などに印刻したり、使用例は多いのであります。ウイリアムベッペ氏が、曾て、ネパール国境に近いピブラワコート附近で、釈尊の御遺骨を収納した壺を発見した際、その中に、黄金の薄片に印刻した卍章が存在したことは有名な話であります。

そうした使用例は、仏教の伝播した地方に多く見られるのであって、神聖、吉祥、幸福

の一般的意味から、漸次、縁起のよい仏力を示す記号として使われ、後には寺の紋章や、芸術的な模様などになって来たものでありましょう。

「まんじ」は、サンスクリットでスワスチカ (Svastika) バリーで、サッテイカ (Satihika) が原語で、字書によると、

善、良、福、快、満の状態、即ち吉祥、慶福等の意味で、後に万をあてはめて、まんじと称しております。要するに吉祥万徳のあつまりと云う極めて縁起のよい意味であります。吉祥海雲相（きちじょううんそう）などと漢訳では申しております。万の字は、唐の則天文字と言われますが、一方、徳字と訳される場合もあります。

「まんじ」の型には、後世の紋様に見られるようにいろいろありますが、仏教での基本的なものは右せんを表わす右まんじ（卍）のようであります。仏典にもそのように述べてありますが、密教の発達に伴って、右まんじは胎藏界（たいざうかい）の慈悲を、左まんじは金剛界の理智をと、その使用法も段々むずかしくなって来ております。

私は、仏教での「まんじ」は、光明と関係が非常に深いのではないかと思います。仏陀釈尊には、三十二相と申して、凡人と異なる特相が三十二あったと説かれて居りますが、その中の一つとして、仏の胸の上に吉祥海雲相（きちじょううんそう）即ち、まんじがあります。経説によると、第十六相になって

いますが、諸経論の説をまとめて見ると、「金剛莊嚴（こんこうしょうこん）心藏中に於て光を放つ」「胸の上に功德莊嚴（くどくしょうこん）の金剛卍あり、光を放つ」「仏を観ずるに胸臆（きょうおく）に卍字印相あり、この字間円光を生ず」「胸の万字光を湧出す」などとありまして、勿論、大乘仏教の信仰的表現が加わっていることは十分に認めますが、「まんじ」と光明との関係がわかるのであります。

仏身から、又、眉間の白毫相（びやくこうそう）から、一大光明を放出することは、大乘經典によく説かれる仏菩薩の奇瑞であります。胸の上のまんじから一大光明を放つ異相は一寸珍らしく感ぜられます。このことは、まんじ自体が、仏教の信仰的意義以前に

光と関係あることを意味しているものではないでしようか。

古代のアールヤ民族は、太陽崇拜から、右まんじ(卐)が太陽を、左まんじ(卐)が月の運行を象徴していたと学者は申して居りますが、アールヤ民族と共にインドで行われた「まんじ」なるものが、光明の意味を有し、仏教に入ってから、その意味を失わなかったことは肯定出来るのであります。一例として、摩利支天経の説でありますが、摩利支天のもつ扇の中に卐があり、その「まんじ」の四曲内に、四つの日輪の形をあらわしております。このことは摩利支天が、日神 或は、かげろう(陽炎)の表象などと申されている特種のはたらきを示しているわけで、その「まんじ」の中に日輪をあらわすことは、恰も、インドの事火の記号に通ずる如くであります。梵崇拜の教徒は、火の炎上する形を卐で示し、その「まんじ」の中に形像を画くと言われております。尤も、こうした経説は、後世のもので、使用する材料にはならぬと申されればそれ迄ですが、このような、珍らしい説相をもつ經典に出てくるまんじ説にはイン

ド的なまんじと光明思想が、その基礎になっているものとも考えられるわけでありす。

そもそも、「まんじ」の起元については、幾多の説があり、中には、水流と結びつけたりする説もありますが、その多くは、光、太陽聖火、聖火を起す木、火神、光明、創造神の記号、火徳、等から出ているものと考えられており、火や光に關係のある場合が多い次第であります。尤も、中国で、十の字が十善の章であるまんじになったとする説や、日本の縄紋土器に紋様としてのまんじが見られると言ったように、何分にも分布がひろく、使用意図も雑多であるから、決定づけることは一寸無理かも知れませんが、素朴な原始人の芸術的宗教的本能から生れた、寧ろ、火や光に対する自然觀のあらわれが「まんじ」になったと云う見方などが無難のところでしょう。随て、光明を意味するものが「まんじ」であると申しても強ち附会の説とはならぬと思ひます。云わば「まんじ」は、光明遍照です。さて、仏像に好相の一つとして表われる「まんじ」は、前述の如く、胸の上が普通でありますが、中には異説もあります。説一切

有部毘奈耶雜事と云う律の書には、仏の手(左手)に、まんじあることを記し、セイロン、アマラパチーの仏足石(ぶつそくせき)には、まんじが仏の足に表され、又、アリスゲッティ氏は、仏の金剛座に、まんじあることを述べております。

併しこれ等は何れも、仏徳讃嘆の信仰的あらわれであります。ところが信仰的と申しても一寸気になることがあります。それは新訳の華嚴經四十八に「如来の胸臆(むね)に大人相あり、形は卐の如し」とありますが、この大乘經典の表現は、實際の仏身に關する伝説を記したものでどうかと言うことであります。勿論、仏伝による釈尊伝道の状況や、仏教のことなどは推知出来ても、釈尊の肉体上のこまかな部分のことなど知る由もありません。實際、釈迦如来の胸の上にまんじ模様がでていたものでありましようか。

■若し、仏の胸上にそうしたものが見られたとすれば、釈尊の胸上の筋骨が——(よくやせた人の胸に見られる骨模様)——そのような形に見られたものでありましよう。日常の伝道生活で、最低度の食料と資具に甘んじて生き

抜いて来られた後半生の釈尊の肉体は決して、デブデブしては居られなかったことでしょう。釈尊の骨々とした御胸を眺めた弟子達は、古来の瑞章（ずいしょう）まんじと結びつけて拝んだことでもあったでありましょう。そうしたことが、伝承されて、華嚴經に

示されるような信仰的表現にまで及んでいるのではないでしょうか。推理ばやりの現代のこと故少しは推理させて貰います。誰か、仏陀釈尊の聖なる肉体と、後世の信仰との関連性を説き明して下さらないでしょうか。

与えられた枚数も尽きますので、最後に、

私の畏敬する浄土宗の生んだ偉材、故渡辺海旭先生は、光明（Light）と愛（Love）と、生命（LIFE）と、自由（LIBERTY）の四つのエル（L）を組合せた宗教記号とする或外人の新説に賛意を表しておられますが私も同感であります。

火宅の世の中

世はつねに燃えている。貪りと瞋りと癡かの火にて燃えている。この火宅の中から、急いで逃げ出なければならぬ。

この世の中は、定めなく又はかないものであるから浮世といえます。しかし仏教では、この世の中のことを火宅といえます。

ある時、ある家が火事になり、火勢はますますはげしく燃えさかっていました。ところが炎々と燃えているのに気がつかないのか、少し離れた子供部屋では、子供たちが遊びに夢中になって、さも、面白そうにしています。人々は驚き騒いで遠くから叫んでみたが子供たちは遊びをやめません。このままでは子供は煙にまかれて焼け死なないとも限りま

せん。その時、長者が一計を案じて「早く門の外に出てご覧、外に羊車、鹿車、牛車がきたぞ」と叫びました。

子供たちはそれは楽しそうだと外に駆け出して行ったので、無事に火宅から逃げ去ることができました。ところが外に出た子供たちの見たものは、羊車、鹿車、牛車の三車でなくて、一台の大白牛車でありました。

火宅とはこの世の中を喩えたもので、欲や苦しみという炎に包まれている姿をいったものです。そこでいつまでも遊びほうけている子供の姿は人間のことをいうので、いつ焼け死ぬかも知れぬ危険の中にいるわけです。

羊車とは、仏道とは何んなものであるかを知るに必要な第一歩であって、苦集滅道の四諦という理論のことです。また鹿車と

は、仏道を学んで稍進歩したものが、更に学ぶべき十二因縁のことで、世界や人間を構成している有様をいいます。更に牛車とは、成仏するためになす修行のことです。

長者とは申すまでもなく釈尊のことで、ただ大声を出して叫ぶだけでは、面白そうに遊んでいる人間たちが、自分の危険に気がつかず火宅から抜け出ようとしませんから、仏道という道のあることを教え、人間を救ったのであります。そして門の外に出て見た大白牛車とは、三車の理論や修行ばかりでなく、それ以上の往生ができる道のあることを示したものであります。財物があっても人は貪ります。すぐに怒って人を憎み自分まで憎みます。怒りは怒りを続発してゆきます。こうした愚かさの中に、日日わが身を転々としているのが、この世の火宅であります。



近代高僧伝

黒田真洞

大橋俊雄

浄土宗の教学は明治の末から昭和の初めにかけて、多数の人材を擁し花々しい活躍をし、他宗の瞠目の的となったけれども、このような大鹿、柔門、渡辺、荻原、望月、椎尾矢吹、小野という「三勸学五博士」を有する学問宗をつくりあげた功労者ともいうべきものは誰人であつたろうか。それはいうまでもなく黒田真洞その人であつた。

明治初年増上寺山内源興院に設けられた興学所や、同三年知恩院山内にできた勸学院は同十二年東部および西部の大学林と名は改められたけれども、時勢の要求はこのような教師養成機関の変則を更正しようとしていた。

そこで世の求めに応じてつくられたのが浄土宗学本校と支校で、支校は全国主要な地域に八校つくられた。本校は二十年九月芝天光院を仮教場として開かれ、初代の校長には真洞が就任した。

彼は安政二年二月江戸日本橋に黒田嘉右衛門の次男として生れ、五歳のときには既に増上寺の真我寮に入つて剃髪し、長じてのち京都に遊び宗学を究めた。明治七年江戸に帰り岸上恢嶺等について宗余乗を学んだが、未だ不充分であることをさとした彼は十二年再度入洛し、智積院の弘現や泉涌寺の旭雅に師事して性相の学をまなんだ。彼の師真我は増上

寺の学寮主からすすんで三河の名刹大樹寺に住した人であり、弟子の教育にはことに熱心であつた。前途に明るい希望をもち、向学の念にもえる真洞の願いを心よく聞きいれて研究に従事させたという。それなればこそ後年彼が教育に熱心であつたのも、青年期における師の影響の多大であつたことをみのがすわけにはゆくまい。

同二十六年四月アメリカのシカゴで開かれた万国宗教大会には推されて評議員となり、時に彼は渡米こそしなかったが「大乘仏教大意」という本を英文で書いて頒布した。勿論この大会で頒布されたものはこれのみではなく、清沢満之の「宗教哲学骸骨」や前田懸雲の「真宗綱要」など凡そ七部ばかりあり、それぞれ数万部ほど配布されたが、中でも彼の著書には異常な関心があつまり、欧米学者の間でも重要視され、ドイツ訳も試みられたという。

三十三年七月には伝道講習院長となり、三十八年四月には浄土宗大学長となった。

伝道講習院は布教師の養成を主眼として設けられたものであり、学生たちが屋外で伝道

するときには真洞は自から率先して出かけて
いってトラクト配りをするなどして学生をは
げまし、又今の改良服のもととなったものは
彼が講習院生のために正服として考案したも
のであったという。

学生たちは腰から下は普通に用いられてい
るような袴をつけ、その上に改良服を着用し
た。改良服といっても腰から下は非常に短
く、せいぜい鯨尺七寸ぐらいなものであった
から、その下から袴が見えていた。それに伝
道袈裟としてたたみ五条をかけて両襟にたれ
ていたから、今から見ると異様なようにも思
われるが、直綴（ジキトツ）を用いていた当
時の人たちにとっては、どれほど便利であつ
たか知れない。この改良服を黒田服と呼んだ
人もあったらしい。直綴というのは上に偏衫
と下に袴を別々に着用するようになっていた
衣で、今でも律院の人たちは用いているが、
この偏衫と袴を別にしないで、直かに縫いつ
けたから直綴といったのである。従って直綴
も前にくらべれば便利であるが、改良服は尚
更ら活動しやすくつくられたということがで
きよう。伝道講習院の学生が改良服をつけて

いた頃、浄土宗大学の学生は白衣に黒の素絹
が正服であり、素絹は直綴の袴を最も短くし
て下部の方にぬいこんだものであったから、
改良服をきていた人は羨望のまどであつたに
ちがいない。

彼はやせ型の顔で、まゆ毛が黒く、所々に
白毛がまじっており、眼光炯々として如何に
も高僧というにふさはしい風をたたえ、言葉
も句切りがしっかりしていた。そして何事を
するにしてもきちんきちんとしていた彼は、
或時寄宿舎をまわって「どうもあなた方の寄
宿舎の生活のようすを見ますと部屋の整頓が
みだれている。机や本箱の中がみだされてい
る人が多いように見受けられます。先ず部屋
を整頓し、机上や本箱をきれいに片付けてか
ら勉強しなさい。机や部屋が散らかっていて
は勉強もできるものではない」と感想をのべ
られたこともあったというほど、彼は几帳面
な人であり、学徒の養成には特に力をそそい
でいた。

大正から昭和にかけて浄土宗のうんだ錚々
たる人たちの中で多かれ少なかれ、彼の息き
のかかっていた人はいないといっても過言

ではあるまい。それほど彼が宗門の教育に力
をいれたことは、後の浄土宗を大ならしめた
原因となったのであり、従って「黒田さん」
といえは明治教学界での偶像にすらなってい
たのである。

一見羅漢さまといったタイプの彼も晩年は
赤坂の法安寺に移り、坊守を迎えた。そもそ
も浄土宗議会が宗規上公然と妻帯を許すとい
う提案を可決したのは明治三十四年四月のこ
とであつた。それ以前は浄土真宗のみが許し
ていたものを、浄土宗が他宗にさきがけて妻
帯を許すことにしたのは、当時の教界にとつ
ては大英断であつた。

三十九年八月には勤息義城や大鹿愍成と共
に勧学に叙せられ、翌年四月宗教大学長とな
り、校地を巢鴨に求め教育百年の計をたてて
校舎を小石川から巢鴨に移して、内容の充実
をはかるべく献身的努力をはらうなど、一身
を宗門教育のためにささげた彼も、病には抗
するすべもなく大正五年正月二十五日、六十
七歳を一期に安養の浄土に旅立たれた。

法名を、大蓮社精譽上人学阿真洞大和尚と
いう。

虎の跳躍 二則

牧尾 良海



てから、

「早く喰つて了えば良かったものを、不覚にも取り逃がしたわい。」

と、大いに口惜しがったが、庭へ出て来て一声高く咆吼した。と、忽ちにどこからともなく十数頭の虎が現われて、まるで朝廷の謁見場の中みたいにならずらりと整列をした。

「ここで折よく笛を吹いていた若造を見つけしたが、儂が眠ったすきに逃げおったのじゃ。

皆、手分けをして四方八方を探して見つけ出して来い。」

頭梁株のその怪物が命令を下すと、虎どもは四方に散って行つた。

やがて五更の頃になると、又そろそろと集まって来た。そうして、口々に報告した。

「私どもは、それぞれ四五里も先へ行つてそやつを探したんですが、どこへもぐりおったか、影も見えません。」

ところがである。拙いことに、月がだんだん西へ回つて、光も斜めになって来たので、木の上の笛師の姿がありありと見えて来て了

った。虎の頭梁はにんまり笑つて、

「お前らは、彼奴が雲の如く、電の如く消え

僧房の中へ入って来た。

笛師は驚いて、階段の

下へ降り立って震えてい

ると、その虎の頭をした怪物は、

「何という好い音色であろう！ もっと続けて吹いてくれ。」

と言うのである。そこで笛師は、懸命に五六曲吹奏して、やがてそつと様子を伺うと、怪

物はいつの間にやら寝入つて了つて、大きないびきをかき始めた。笛師は、そろりそろり

とその部屋をぬけ出すと、今度は大急ぎで庭の高い木の上によじ登った。枝や葉がこんも

りしげっているので、身を隠すには都合が良かった。

やがてのことにその怪物は眼を覚まし、笛師が見えないのできよろきよろと四辺を探し

唐の天宝の末年のこと、安祿山が叛乱を起して、潼関の守備も敗れ潰えたので、都の人々はちりちりに疎開して兵難を避けていた。

梨園の弟子の中で、笛を専門に仕えていた笛師某も、終南山の谷間の或るお寺に身をひそめていた。

空気も澄み切つて月皓々と輝やいているある夜、華やかだった宮廷生活の思い出も今は哀しく、心千々に乱れる憂いをはらすすがにもと、愛用の笛をとり出して唳々と吹き鳴らしていた。高く、或いはむせぶ様に笛の音が山谷に広まって行つた。

突然この時に、頭の形は虎で下の方は人身をした一物が、真つ白な着物をつけて外から

去ったと思ったのだろうが、見ろ、御馳走はちゃんとあそこに鎮座しますのじゃ。」
と言うと、虎どもを率いて木の下に集まり、飛び付かせようとしたが、何しろ高い木なので、爪もかけられない。

親分の虎もさこそと、貫祿を示して、一段と高く跳躍したが、これまた駄目だった。そのうち、東の空が明るくなり、おちこちで人声もする様になったので、虎どもも残念そうに、ふり返りつつ消えて行ったということである。

二

滄州饒安県に、貧しい一人の農夫があつた。或る時のこと、野原を歩いていると、一匹の虎がやって来るのに遭遇した。逃げようとして懸命に走ったが、ついに追いつかれて了った。

「もうこれで喰われる！」

と観念したが、どうもその気配を示さないの
で、よくよく見ると、その虎は痛そうにして
左足をさし出す様にしている。大きな竹の鋭
い切り端しとその足のつけ根に突き刺さって

いるのである。虎はすっかり閉口しており、腹這いつつ耳も垂れなえている。その竹の刺さっているのを抜いてくれと言わんばかりの様子であつた。

そこで、竹を抜いてやると、虎はいかにもうれしげに彼にまつわり、尾を振って彼の後について来た。

彼が家へ帰りつくと、虎はその家を見極めて、何処へとなく姿を消した。

その夜のことに、一匹の鹿が彼の家の庭先へどきりと投げこまれた。虎は御礼心のつもりであろうか、その後一年余りも続いて、野豚や或いは鹿などが投げこまれて、毎月毎月こ
うした贈りものが絶えなかつた。

野外でこの虎に出会っても、害を加えるどころか、親しげについて歩くほどであつた。

この人の家は、こうした虎の贈り物のお蔭で、だんだんと金もでき、暮しが大層楽になつたので、或る時、いつものほろ着物でなく新らしく作った小ざっぱりした服を着て、野外へ出かけて行つた。

ところが、例の虎は、その人が服を代えたことに気が付かず、後からばっくりその人

を噛み殺して了つた。

家の人は、泣く泣く野辺の葬送を終り、悲しみにくれていると、或る日のこと、例の虎が又その家にやって来たのである。

彼の母者人は、虎を見ると、憎悪をこめて罵つた。

「うちの息子は、お前が棘で苦しんでいるのを助けてやった筈だよ。その徳に報いることをしないで、かえってその息子を噛み殺したんだ。どのつら下げて今更この家へ来たんだよ？　いくら畜生でも、恥じないのかね？」

虎は、意外な怒声を聞いて、本当に羞ずかしそうに首をうなだれて出て行つた。しかしその後も数回にわたってその家の傍らへ出て来て、自ら本当に確かめるものの様にそつと家の中を覗き見していたが、その人がこの世に既にいないということを確認すると、余りにも大きな己れの過失を悟ったものか、身も世もあらず号哭し、その家の庭先へ入ると、命をかけて高く高く躍り上り、われとわが背骨を打ち碎いて、自らの生命を絶つたのであつた。

病床の法然上人

建曆二年正月二十四日の正午頃、大谷の禪房の上に紫雲が低く棚引いた。これを遙か遠くの西山の水の尾で炭焼く人々が眺めて、これは容易ならぬ瑞相に違いないと思った。そこでこれら十数人の人達は連れ立って、わざわざ禪房にきて山の上から眺めたことを語ってくれた。また折から一人の禪尼が広隆寺からの帰り途で、同じく紫雲の棚引くのをみてこれはただごとでないと思い、禪房に寄って行った。

その頃、禪房では法然上人のご容態がますます衰弱されていた。その前日までは高声念仏を唱えられていたが、その日の日暮れ頃からは、つとめて高声で唱えられるのが仲々のご苦勞に見受けられた。お側につめていた五六人のお弟子たちは、助音のつもりで上人と声を合せてお念仏を唱えるのであった。

このようにして禪房にいた多くのお弟子た

ちは、紫雲の棚引いたことは、今日もまた阿彌陀さまがお迎えに来られたのであると信じて疑うものがなかった。何故なら四日前の二十日の十時頃に、同じく紫雲が禪房の上にあった。この時は紫雲の中に更に円形の雲が見られた。道行く人々がこれを見て、皆不思議がった。お弟子たちは、これはいよいよ上人のご往生が近づいたしるしである等と話し合っていた。このお弟子たちの囁き合っているのを上人が聞かれて、こう申された。

「紫雲が棚引いたのは、私一人のためばかりではない。私の往生は、一切衆生がお念仏に生きる信仰をもってもらうためである。そのために瑞相が現われたのである」

お弟子たちは上人のご臨終近しと心配しているのに、その時になってまで上人が、衆生に対するお念仏信仰を薦められているのをこの上なく有難く思った。ところが同じ日の午

後になって、上人がしきりと上の方を見守っておられるので、お弟子が「阿彌陀さまのお迎えでしようか」と質ねると、上人はその通りであると静かに頷かれた。

それより、更に数日前の十一日のことであった。上人は急に床の上に起き上り、一しきり高声念仏をされてから「お前たちも一緒にお念仏を唱えるがよい。お念仏の功德は一人もらし給う事がない。今も阿彌陀さまが、観音勢至の両菩薩を初め、多くの菩薩さまを連れて、お迎えに来られた。お前たちには、それが拝めるか」と、以前のようなご元気な声で申された。ところが、お弟子たちの目には仏さまが拝めなかったもので、いろいろ相談の結果、上人の病床の右側に三尺もある阿彌陀像を安置することにした。

上人はすでに八十才というご高齢であったので、ご衰弱も無理のないことであつた。しかしここ三四年というものは、耳も遠く目もかすまれて急に老けられた。特に最近食欲もなく、従つて目に見えて衰弱が著しかったので、遂に正月二日から病床に臥されることになったのである。しかしこうした急なご衰

弱は、お年のためばかりでなく、実は遠流のお疲れのためでもあった。

上人の流刑のきまったのは、例の住蓮安樂の事件があつて間もなくのことであつた。お弟子たちの心配は並々なぬものがあつた。ある人は上人に対して、表面だけでもお念仏の興行をやめ、内々の御化導になさつて下さいと願ひ出た。しかし上人は断固拒絶した。「われたとひ死刑にをこなはるとも、この事いはずばあるべからず」

上人のお念仏弘通は命をかけてのご信念であつた。この激しい一言で、更に言葉をつく者はなく、ただ上人の至誠に打たれて泣くばかりであつた。

更に上人は、今回の流刑こそ遠くの地までお念仏を拡める絶好の機会であるとされた。「年来の本意をとげん事、すこぶる朝恩ともいうべし」

お念仏を弘通するためなら、逆縁すらも悦ばれた。こうして京都を発たれ、土佐の国に向われたのは建永二年三月十六日、上人七十五才のことであつた。この高齢にしてこの意気、この熱情はまさに天をつくばかりであつ

た。はたして旅の途中で様々な御教化をなされた。しかし幸い同年八月に勅免の宣旨があり、摂津の勝尾寺に四年間おられた。そして建暦元年に入洛された。

しかし勝尾寺に戻られてから急に老けられた。火の玉の如く燃えて京都を発たれてから僅か一、二年にして上人は「耳目朦昧にして色を見、声をきき給事、ともに分明ならず」といわれる位に変わってしまった。流刑のお疲れが上人の身体に大きく影響したと想わざるを得ない。このようにして、入洛された翌年正月二日から遂に病床に臥されてしまった。

その時から上人は、往生についての外は、何も申されず、高声にお念仏を唱えるばかりであつた。例えウトウト睡られても、その間は口のみ動かされ、声は聞えずともお念仏を止めることがなかった。

その翌三日のこと、法蓮房が上人に

「古来の先徳には、みな遺跡があります。しかし上人には一堂の建立すらありませんでした。ご入滅の後で、どこを御遺跡と致したらよいでしょうか」

と質ねた。すると上人は答えられた。

「あとを一廟にしむれば遺跡あまねからず、予が遺跡は諸州に遍満すべし。ゆへいかなとなれば、念仏の興行は愚老一期の勸化なり。されば念仏を修せんところは、貴賤を論ぜず海人漁人がとまやまでも、みなこれ予が遺跡なるべし」

お念仏の声するところは、どこもみな上人の遺跡である。建物が大きくて立派であるから遺跡に相応しい等と、もし思うものがあればもうそれだけで上人のみ教えに逆いていることになる。このお詞は常に胸に刻み込み、上人のご遺志に逆かぬよう努めたいと思う。

いよいよ正月二十五日となつた。午近くにになると、上人のお念仏の声も次第に細く微かになった。思い出したように一時高声になつても、すぐ微声になった。遂に上人の御臨終であつた。上人は頭を北に、顔を西に向けて横たわり、その上に慈覺大師の九条のお袈裟がかけられた。

光明遍照、十方世界、念仏衆生、攝取不捨最後に上人はこう唱えられ、ねむるが如くにして息たえ給うた。お顔色は鮮やかに、笑つておられるように見受けられた。(編集部)

童話

ハントクの手

高橋良和



ハントクはおしゃかさまのお弟子の一人です。でもハントクはたいそうおぼえがわるくじぶんのなまえもわすれるほど、わすれほいのです。

だからおしゃかさまは、ハントクに自分のなまえをくびにかけて、それでなまえをおぼえるようにされました。

それでもまだだめなのです。おしゃかさまはたいへんにかわいそうにおもわれて、五百人の弟子のなかから毎日一人づつかわしてハントクにお経のことばをおしえました。

五百人も弟子たちは、三年ものながいあいだ、このハントクに一口づつのお経のことばをおしえましたが、やっぱりだめでした。

「なんというおぼえのわるいハントクだろう」

と、みんなはあきらめました。

そのことばをおききになったおしゃかさまは、ある日のこと、ハントクをおよびになりました。

「これハントク、おまえはおぼえがわるいそうだが、これ一つならおぼえられるだろう」とおっしゃって、

「わるいということはいらないように、正しい心をもってそれを一生まもることをわすれないように。」

と一口づつおしえられました。

ハントクはそのときなみだを流してよろこびました。何度も何度もくりかえして、そのことばをいいました。

すると、今まで一口もいえなかったハントクが、このことばだけはいえるようになり

ました。

おどろかされたのはおしゃかさまです。

「おおハントク、よくおぼえました。」

おしゃかさまはかんしんされました。

それからというものは、ハントクはいつでも、どこでもこのことばをくりかえしていつておりました。

それはある日のことでありました。

ある国の王様が、おしゃかさまと、たくさん弟子たちに、くようをしようといたしました。

そのときおしゃかさまは、ハントクをおともにつれて、このお城にやってこられました。

ハントクはおしゃかさまのうしろから、鉢をもつてまいりますと、門番がこのハントクをみつけて、

「三年かかってもお経の一口もいえないハントクは通すことはできない。」

と門をしめてしまいました。

「おねがいします、わたくしはおしゃかさま

の鉢をもっているのです。」

といいましたけれど、門番は通してくれませんか。

ハントクはそのときこまりました。

それでもゆるしてくれませんか、ハント

クはしかたなく鉢をもって門の外に立っておりました。

しばらくすると、奥の部屋でおしゃかさまのおはなしがはじまりました。

すると、そのとき、おはなしのまっさいち

ゆうに、おしゃかさまの前に、鉢をもった手

がにゆうとあらわれたのです。

「これはだれの手だ。」

みんながおどろきますと、おしゃかさまは

禍を持ち帰るな

だれでもあやまちがあるものです。しかしあやまちと知ったなら、自ら悔いて改めることが大切です。水は流れて海に入り、自然に

広く深くなります。このように罪も自然に身体にくい込みます。もし改めるならば、罪は消えてゆきます。

また他人からそしられることがあります。

その時には、慈心を以て彼をかばいなさい。重ねてそしられたら、善意を以て彼に対しなさい。けっして報復の念を起してはなりません。福德はここにあり、害禍はかしこにあります。

何か品物を他人に贈ろうと思っても、その人がどうしても受け取らない場合には、その

品物を持ち帰るより外に仕方ありません。

もし他人から、ののしられたなら、黙ってい

て答えず、その人の静まるのを待ってから、

ゆっくり話し合うことがよいのです。そして

その人にこういえばよいのです。

「あなたは私を罵りましたが、その罵りの言葉は私の耳から入らずに受け入れることができません。だから罵りの言葉は、そのままあ

なたにお持ち帰りを願うより外ありません。

あなたが他人を罵ることは、あなた自身にと

って禍となることです。こだまは声に応じて

生ずるものであります。影は形があるから生

ずるもので、しかもその形に従って離れるこ

とがありません。だからあなたは自分で禍を

つくり、それを自分で持ち帰らぬように慎ま

なくてはなりません」

「これはハントクの手です。ハントクはりっ

ぱな人になったのです。それを知らない門番

は奥に通さないでハントクは手をのばして

わたしに鉢をそなえているのです。」

とおっしゃいました。

おどろいた王様はさっそく門番にいいつけ

て、お城の門をあけさせました。

ハントクは静かに門のなかに入って、おし

やかさまの前にすすみました。

そのときのハントクのからだからは、まる

で光をはなっているように美しくみえました

王様はふしぎそうにそれをみて、

「おしゃかさま、これはどうしたことでござ

いますか。」とたずねました。

「人間をたくさん招いてくようしたからえら

くなるのではありません。よい行いをするこ

とです。ハントクはたった一つのことばかり

おぼえなかったのですが、わるいということ

はしないように、正しい心をじーっとまもっ

てきたからです。」とおっしゃいました。

ハントクのからだだから光がまた強くさして

いるようです。みんなの人々はそのとうとい

すがたをじーっとみていました。

ラーゲルの思い出第六話

実話

指揮のサボタージュ

吉野翠幹



衛兵所といつても

机の外は板椅子に板寝台しかないガラシとした部屋であるが、そこで私はさつきからカマ

キリ中尉と向き合っていた。人払いをしたと

みえ、その間中誰も入ってこなかった。カマ

キリ中尉は時には熱情こめて、時には静かに

諭すようにして説教を続けていた。彼はもと

もと早口であつたが、こんな熱心に説き聞か

せてくれたのでは、私には何が何やら全く意

味が判らなかつた。どうやら彼の口調や態度

からみて私に対し怒っている様子でなかつた

が、言葉の意味が判らなくては、私としては

唯彼の口が急しく開閉するのを眺めているよ

り外はなかつた。

ソ連人は大てい個人的には好感のもてる人

たちであつた。いわば純真な人が多かつた。

そのかわり相手が理解しようがしまいが、全
くおかまいなしに独り喋りまくって、後はけ
ろりとしていることが多かつた。

ある時、ある監督に、私はこういつた。

「トルストイは文豪である。ドストエフスキ

ーは偉大である。私は彼等の作品を沢山読ん

で感服している。またチャイコフスキーの音

楽は日本で誰からも愛されている」

するとその監督がすっかり感激してしまつ

た。第一に私がロシア文学を読んだことがあ

るという点で感心し、それと同時に音楽を愛

するという点で驚いていた。彼は感極って、

喋る喋るわ、実に長々と独り喋っていた。

彼は首を振り両手を大きく動かしながら説明

し、恐らくはソ連の文学と音楽のことを語つ

たのであろうが、私にはさっぱり意味が判ら

なかつた。そして最後に

「日本文学の代表的作家を教えてもらいたい
いつか必ず勉強したいと思う」

といつた。止むなく私は

「紫式部と井原西鶴と夏目漱石である」

というと、彼はしきりとノートしていた。

やれやれと思つていると、今度は

「日本音楽の代表作家を教えてください」

ときた。

「音楽には日本古来のものと西洋音楽とある

が、近代では滝廉太郎と山田耕作である」

といつた。彼はこれも熱心にノートしてか

ら、さも申訳ないように

「日本について機会を得て必ず勉強したい」

といつた。彼が大真面目なので私も閉口し

た。しかしその後は私に対して非常な好意を

寄せ、便宜をはかってくれたので、私にとって有難い監督の一人となった。

また何かというとき「何故だ」と問い返す癖のある監督がいた。私たちが苦情や希望をいうと必ず「何故だ」といった。そこでしどろもどろ片言で説明すると、また「何故だ」といった。何故だとは何故だといいたい位のもので結局は説明の言葉が続かないから、こちらが引き下ることになった。私は普段からこの監督の「何故だ」が癪の種であった。ある時、この監督が今日の作業が悪いということで、私に苦情を申し入れてきた。何んな文句をいっているのか判らなかつたが、長々と喋らせておいて、今度は私が「何故だ」と一言きめつけてやった。すると彼は急に勢い込み、私にかみつくように顔色変えて、喋るわ喋るわ、大きな声で滔々とまくし立てた。これに懲りて私は「何故だ」と問うことを止めたが、不思議なことに、その監督もそれ以後は「何故だ」をいわなくなった。



私はバチムという言葉で「何故だ」と解釈していたが、ほんととは別の意味があったかも知れない。私がバチムと一言怒鳴ったことが、この監督に余程応えたらしかった。

さて、カマキリ中尉が、私に懇々と話す内容は殆んど私に理解できなかったが、大要は次の通りであることに間違いなかった。

「君の言論を抑圧するわけでないが、できるだけ要らぬ言辞を慎んでもらいたい。君の任務は作業班を指揮して少しでも能率を向上させることである。従って作業の手配をきめ、その実施に当っては兵士を監督し、いかにしたならノルマが達成できるかを考えるべきである。君の言論はこの問題に限っていうことにしてもらいたい。共産主義が君の主義と違っているとしても、それを兵士に論すべきでない。兵士に対する君の任務ではないからである。もし君が自分の忠告を聞き入れず、君が窮地に追い込まれた場合は、君ばかりでなく自分も困ることである。十分自重してもらいたい」

カマキリとは勿論渾名であるが、彼の姿が長身でカマキリによく似ているからで、決し

て彼の性格に関係しない名前であった。彼は勲章を持っていなかったので、かつては独軍の捕虜となったことを物語っていたが、実に思いやりの深い将校であった。ラーゲルの係将校の中で一番親しみの持てる中尉であった。

カマキリ中尉が長い説教をしている間に、私は何故急に衛兵所に呼び出されたか、漸く思い当るところがあった。

その数日前のこと作業場の休憩時間に、数名の兵士にこんな話をしたことがあった。

「君たちが共産主義賛成の署名をすることは結構だし、私からもどんどん署名するように諸君に薦めているところである。何しろ内地に帰還できる資格を得るためにはグループに入らなくてはならないし、誰も帰りたいのであるから当然署名すべきだといってきた。しかしラーゲルの生活や毎日の作業に感謝することだけは止めてもらいたい。ソ連建設のためにこの重労働を感謝しているという文をモスコアに送ったようだが、そこまで嘘をいう必要はあるまい。」

日本政府がソ連に対して、われわれを早く帰還させろと交渉することがあろう。その場



合、実はこの通り感謝文まである位で、

われわれ一同が満足して日常を送っているという証拠にされたらどうなると思う

か。抑留者ではなく、自発的に積極的にソ連開発に協力してるわけだから、決して強制労働ではないという証拠を与えるようなものである。これでは一日も早く帰還したいためにグループに入る意味がなくなり、逆に帰還を遅らすことになる」

この私の談話が機を逸せずソ連側に知らされ、さてはカマキリ中尉のお説教となったのである。いっどこでも自分一人が利を得ようとする者がいる。ましてグループに入ってから、そこで成績をあげようとするには仲間よりもより多くの密告を働かねばならなかった。私の僅かな話でも、その日の内にアクチブに報告され、直ちにソ連政治部員の耳に入ったとしても、当然のことであつた。ただ私が古くからの仲間であつた兵士達を相手に安心していたのが、私の落度であつた。私はカ

マキリ中尉の忠告を受けて、今後一切何も語るまいと心に決めた。

洗脳という言葉は、私が内地に帰ってから知った言葉であつた。当時はグループ員拡大運動ともいうべき政治運動で、後から考えるとこの運動の第一段階が終りかけていたのが、その当時であつた。私もすきや道楽で妙な目にあいたくないから、自分の言動を慎しもうと決心したのだが、実はそのかひもなく一つの災難がふりかかってきた。これは私の折角の決心も時期が遅すぎたためか、またはグループが私を一つの犠牲にしようとしたためであつたかは別として、つまらぬ計略にひつかかってしまった。

なぜそんな計略があつたか、その前に一応グループが育成された経緯にふれなくてはならない。

私たちがアングレンに到着して二、三月経った頃に、営内勤務者だけの一つのグループができた。これは「国際情勢研究会」と呼ばれ、勿論ソ連側の指示によって生れたものであつた。最初の二三回の会合は、ソ連政治部員将校と一緒にお茶を飲みながら世界地図を

拡げ、各国の位置を眺めた位であつた。しかしお茶をご馳走になったかわりに、彼等はグループ員獲得の義務を背荷わされてしまった。省みるとこの時から内地に上陸する日までに、左右の対立は激化する一方で、遂には血を流す事件を起すまでに到つたが、政治部員が表面に立ってグループを指導したのは、このお茶の会だけであつた。その後はあくまで日本人同士の闘いということと運動が展開し日本人同士で相憎み相争うこととなつたのである。

営内勤務者とは炊事、医務室、縫靴工場に勤務する者である。営外作業に出る者と較べると、肉体上も精神上も楽な点で格段の相違があつた。だからこそ彼等がソ連の欲するままにグループを作つたのであり、こうなつたことに對して誰も不審に思う者はなかつた。

やがてアングレンでの最初の冬を迎えた。酷寒と栄養失調に悩まされていた頃、僅か数名であつたが突如として内地帰還命令が出た。これはまさに青天のへきれきであつた。しかもこの数名が特に選ばれた理由は、共産主義者に相応しくソ連建設に貢献したという

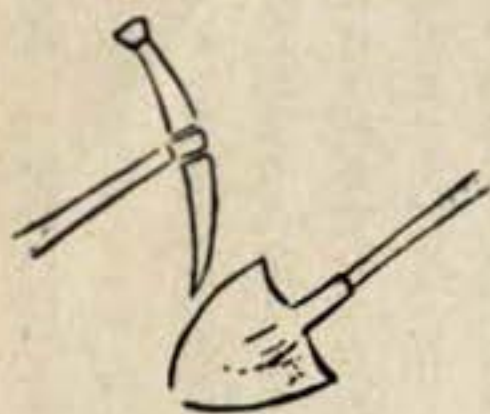
ことであり、ソ連側から感謝状まで授与された。

このことがあってラーゲル内の情勢は一変することになった。内地に帰るためには第一に共産主義賛成の署名をしなければならぬと信じられた。そのためグループは日に日に膨脹して行った。

グループ員とその他を区別するために記章ができた。赤い布をD型に切り抜き、これを帽子の正面につけた。Dはデモクラシーの頭文字であるが、私たちはこれを鶏冠と呼び、彼等を鶏冠組と名づけた。

鶏冠組だけの作業班ができた。この作業班は常に楽で有利な作業についた。概して土木工事はノルマが楽で、例えばハッパの穴掘りの如く、ハッパをかけ終れば穴も消えるので少し位穴が浅さくても

小さくともよいわけであつた。その反対が石切り作業や煉瓦工場であつた。同じくノルマといつても苦勞の点で天と地の相違があつた



ノルマの成績によって食事に差等がつけられた。ノルマをどの位まで達成したかどうかによって、食事を上中下の三等級に分けて支給するのであつた。ラーゲルに配給される食糧は一定であるから一方を増すには他方を減じなければならぬ。これこそ文字通り他人のもので義理するわけであつた。

辛い作業を終つてラーゲルに帰り、減量パンをなめるようにして食べていると、その隣りで鶏冠組が抱え込んでいるパンを盗み見ていやに大きく見えるのも腹が立つた。こうして作業の面と食事の面とで攻めたてられて、ラーゲルは一種異様な雰囲気包まれて行つた。

佗しい毎日の生活にあつて、唯一の慰安は月一回の演芸会であつた。その夜ばかりは思い切り笑い、拍手を送つた。しかし演芸会の脚本も事前検閲が必要となり、いわゆる革新的なものでなければ上演できなくなった。こうなつては演芸会も半身不随の形で、みにゆくものが減る一方であり、結局は演芸会自身が消えてなくなった。

ラーゲルの将校たちが、陰に陽に鶏冠組を

支援するのは当然のことであつた。しかし作業のために一步外に出ると、そうはゆかぬところが妙であつた。

ある監督は私にこういつた。

「われわれはソ連に生れて今日まで、共産主義の中で育つてきた。しかし自分にはまだ共産主義に納得のゆかぬ点がある。共産主義に反対はできないが、しかし信奉するまでになつていない。しかるに日本兵士は僅か一年位でよく共産主義者になれるものである。自分には判らないが、この事実について自分は感服し、且つ驚いている」

また作業の内容によつて、小さなドライバ―、鋸の歯等のように便利な小道具を使用することがあつた。しかもこれらがよく紛失した。道具の管理は監督の責任であるから、道具が失くなると、一応兵士たちを調べさせて欲しいということになった。そんな時、監督は鶏冠の兵士だけしか調べなかつた。私は何故全員を調べないのかと質ねると、

「物を盗む者は嘘つきにきまつている。自分は嘘つきだけを調べればよいのだ」

といった。大勢の見ている前で、鶏冠組だ

けが整列し、服装検査を受けているのは、さすが私も気の毒になってしまった。

私がカマキリ中尉から忠告を受けてたのはこうしてラーゲル内の対立が明瞭となり、便所への往復にもお互がよけて通るといったところまでになっていた頃であった。

それから二三日たって、例の如く作業に出掛けるために整列していると、私は最も尖鋭を以て知られていた鶏冠組作業班の指揮を命ぜられた。その作業は溝掘りであった。私だけが初めて行った所で、以前からこの作業班が掘り続けてきたところであった。だから私が作業場の検分をするまでもなく、彼等は勝手に分散し、円匙十字鍬を受け取って、各々の部署についた。やがて時間となったので、私は例の如く「作業始め」と号令を下した。

私の号令で兵士たちは一せいに立ち上った。立ち上って部署についたけれども、手に円匙又は十字鍬を持ったまま、全然動かなかった。私が巡ってゆくと、申し合せたように顔をそむけるので、私も声をかけなかった。

れっきとした鶏冠たちにとって、私から号令されるのが不服なのだった。働きた

なければ、それでも構わない。私は時計をみながら「作業止め、休憩」と「作業始め」の号令を繰り返しながら、終日意味もなくその辺を歩き廻っていた。

約七八十名の作業班で、一握の土も動さない奇妙な一日を終った。ラーゲルに帰ってきた。すると衛兵が私を待っていて、すぐに衛兵所に来いといった。衛兵所には所長とカマキリ中尉の二人がいて、立ったままこう話した。

「自分たちは平常通り、各作業所を巡って、君等の作業を監督した。その中で君の指揮する作業班は仕事を全く行わなかった。自分たちは不審に思って、君の作業場には特に三回も巡り、君にかくれて監視を行った。その結果、作業班自身は優秀であるが、君が全く指揮しようとしなことが判明した。これは明かに君の指揮サボタージュである。ソ連においてはかかる指揮官のサボタージュは特に排撃されるところである。」

依って君を重営倉一日に処する」

全くお説の通りであった。私は全然指揮しようとしなかった。しかしこれは最初から仕組まれた計略であったことも明らかであっ

た。私は勝手にしやがれと思いながら、自分の部屋に帰ってきた。しばらくすると衛兵が来て、私にこう告げた。

「営倉の鍵を開けておくから、君の好きな時間に入っていてくれ。君が入ってくれさえすれば私の任務は果せるのだから」

営倉は衛兵所の裏にあり、屋根だけが地上に出ているという地下室だった。折角、衛兵の好意もあることだし、自分から好んで入るところでもないから、なるべく遅く自分の部屋に頑張っていた。しかし余り遅くなると同僚を寝かさぬことで迷惑になるので、十一時を廻った頃、一人営倉に入って行った。

マッチをすってみると、土間に板の寝台が置いてあった。外套を着たまま、ゴロリ横になると昼間の疲れか、いつの間にか睡ってしまった。フト目が覚めると小用を催したので手さぐりで、扉の方に進んでみた。知らぬ間に衛兵が鍵を下したとみえて、扉は固く閉ざれて開かなかった。仕方がないので、なるべく隅の方に行って土間に放尿したら、私が壁ぎわすれすれに立っていることが判り、急いでとび退いた。

(カット久保かの子)

大映「釈迦」を排撃する

大映「釈迦」が製作され、そのシナリオが判ると、南方諸国から外務省宛に抗議文が寄せられ、わが国では全日仏や仏教系大学から、同じく抗議文が発表された。これらは何れも大映社長に対し「釈迦」の上映中止又は一部削除を求めたものであった。しかしかかる抗議は馬耳東風と聞き流され、結局は上映されて多くの観客を集めている。

大映「釈迦」に対する非難は、史伝を無視し下卑た説話を作っていて、これは釈尊を冒瀆するものであるから、仏教徒としては見逃すことができないというにある。こうした非難の一つはダイバッタとヤシユダラ妃との関係についてである。

ヤシユダラ妃は申すまでもなく、釈尊の正妃であって、ラゴラの生母である。ヤシユダラ妃は生れながらにして相好端嚴といわれた。あるときカピラ城外の試芸場で五百人の人々が諸芸を競い、その折に釈尊が第一等であつたので妃となつたといわれている。後に釈尊の叔母と一緒に仏弟子となり、初めての

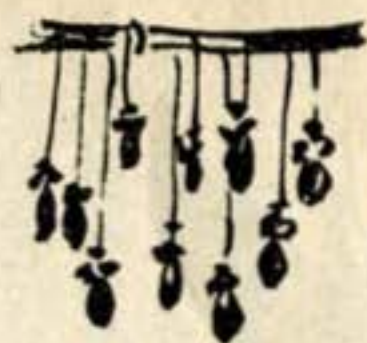
比丘尼になった。密教ではヤシユダラ菩薩といい、マンダラの図中に安置されている位のものである。

ダイバッタは、釈尊の従兄弟であるし、阿難の兄弟である。彼は幼時から諸芸を学びしかもその技は優秀であつた。ある時の競技では、第一が釈尊であつたが、第二が釈尊の異母弟難陀であり、第三がダイバッタであつた。しかもこの三人は、他のものをはるかに引き離して較べものにならなかつた。これからみても彼が諸芸にすぐれていて、釈尊の好敵手であつたことが判る。そればかりでなく彼は、少年時代から釈尊に対抗する意識が強く、嫉心にもえていた。恐らくはヤシユダラ妃についても、釈尊と相争つたことであるうが、結局は釈尊に敗れてしまった。後に仏弟子となつたが、どうにも釈尊の下にいることが気に入らなかつた。漸く悪念を生じてある時は神通を学ばんとし、ある時は自ら釈尊に代つて僧団を教導しようとした。遂には人をして投石器により釈尊を撃たんとして失敗した。そして最後に、自分の指に毒を盛り釈尊を傷けようとしたが果さず、逆にその毒

によって自らの命を絶ってしまった。従つて彼は才能こそ優れていたが、逆罪を犯し、僧団を破壊する計画をしばしば行つて遂には自分で自分の命を落すというこの上ない悪比丘であつた。

大映「釈迦」では、ダイバッタを優秀な釈尊の好敵手としているのはよいが、彼の反逆の根本を、釈尊に対する恋の恨みということに徹底させている。しかも最後になつて、この恨みを果すために、アシユダラ妃を暗室において犯し、妃を自殺させている。こうした恨みの果し方、そしてアシユダラ妃が犯され、仏教で最も戒めている自殺をさせた点において、いいようなない憤りを憶えるのである。しかもアシユダラ妃が自殺した際の釈尊の態度を勝手に描いている。

こうした話のでっちあげは、いかに映画は史伝でないといつても、大映永田社長の卑猥な根性によつて、釈尊伝が冒瀆されたのである。若し西洋映画でマリアを性的悪趣味で描いた監督があつたとしたら、どんな憤激を招くであろうか。それと同じことである。敢えて映画「釈迦」の愚劣さを排斥したい。



聖典
講義

選 択 集 私 解

その七

ふり仰ぐ山の高さ

竹 中 信 常

一 香 炉 の 脚

床の間の掛軸の前に、静かに香煙を吐く香炉の姿は美しい。ゆるやかにうねりのぼってゆく煙の動きと、それに対して、香炉そのものはちっとして、少しの動きもみせぬ静の形である。よくみると、香炉は三つの脚を持っている。三つの点を支えにして、どっしりと構えているのである。これが二つだったら、立ってはいられない。といって、四つでは余けいである。三つであるからこそ、簡素であつて、しかも重厚な構えが出て来るのである。ものごとをきめるギリギリの数が三なのである。

念仏ということも、それが生活の上に写されて、実際におこなわれてゆくには、どうしても、床の間の香炉のよう

がたい教えでも、根本がグラツいていたのでは頼りない。念仏の根もどっしりとしてなければ、波風の荒いこの人の世の毎日に、流し消されてしまわなければならない。

宗祖がこのことに特に留意されたのはむしろ当然のことである。一枚起請文に

「三心四修と申すことの候はみな決定して南無阿弥陀仏にて往生するぞと思ううちにこもり候なり」

として、念仏の根をはっきりと打ち出しておられる。四修のことは後に出て来るのでここでは「三心」について考えてみることにしたい。

三心が香炉の脚として絶対不可欠であるにしても、ここ

じでものの役にたたない。お念仏も、口に称えられてこそ「専修称名」として、浄土教特有の価打ちがあるので、頭の中だけで考えられていたのでは、煙を吐かない香炉と同じである。

こうして、念仏という自動車はガソリンがなければ走らない。口称というガソリンを補給して、浄土往生の大道を、まっしぐらに疾走して行かねばならぬのである。口称以外の念仏では、極楽へのハイウエーをドライブするわけにはゆかないのである。

ところで、三心とは一体どのような「ところ」なのか。その一つ一つについては以下に述べるが、これをまとめていうならば、次のやうな宗祖の言葉を挙げる事が出来る。

「踊躍歡喜の心の起りたらん人は、自然に三心は具足したりとしるべし」

「念仏だにひまなく申されれば、往生は決定としれ。もし疎相ならば順次の往生はかのうまじとしれ。この思いをして我が心をはげまし、三心の具すると、具せざるとをもしるべし」

「三心を具することは、ただ別のようなし。阿弥陀ほとけの本願に、わが名号を称念せば、かならず来迎せんとおお

せられたれば、引接せられまいらせんずるぞと、ふかく信じて心に念じ、口に称するにもものうからず。すでに往生したる心地して最後の一念に至るまでたゆまざるものは、自然に三心は具足するなり」

「踊躍歡喜の心」——お念仏を唱えているうちに、何とも嬉しくてしようのない気持になる。そういった時こそ、三心のそなわった証拠だといわれる。

また、「念仏だけをやすみなくとなえれば必ず往生出来る」と、そういう心をふるい立たせることも、三心具足の念仏である。

また、弥陀の本願をふかく信じて、もう往生することが出来たという気持で念仏することが三心にもついた本当の念仏である。

めくら滅法に自動車を走らせては、極楽へのハイウエーからそれてしまふ。真すぐに目的地に到着するための「運転指針」が必要である。あたりの風景に目をうばわれたり浮気ごろをおこしては、車は道端にひっくりかえってしまふ。香炉に脚のあるように、どっしりとした心根をもって、極楽ゆきの車を運転しなければならない。選択集第八章段の標題に

「念仏の行者は、必らず三心を具足すべきの文」

とあるのはこのためである。

二 プラない念仏

「観無量寿經にのたまわく、もし衆生ありて、かの国に生ぜんと願う者は、三種の心をおこして、すなわち往生す。何等をか三とす。一には至誠心、二には深心、三には廻向發願心なり。……」

つづいて

「同經の疏（善導の觀經疏）にいわく、經に一には至誠心というは、至とは真なり。誠とは実なり」

三心のうちの第一は、今引用した文にあるように「至誠心」（しじようしん）である。真実のころである。

「真実」ということは、うらおもてのないころ、マゴコロともいえる。念仏に限らず、何ごとによらず、このマゴコロの大切であることは、いまさらくどくどしくいう必要はあるまい。人間と人間とのつき合いでも、「あの人は実（じつ）のある人だ」といわれれば、それでもうその人の信用は満点である。マゴコロから発したことなれば、少しぐらい間違ったことをしたり、行きすぎをしても、「マゴコロに免じて、ゆるしてやったらどうだ」などともいってもらえることがある。

人間と人間とのつき合いでもこうなのだから、まして、ほとけ様とのつき合いの場合には、なおさらに、マゴコロが大切になるのは当り前である。ほとけ様を相手にして、二枚舌つかったり、ゴマかしをしたりすることは、絶対にゆるされない。どうしても、真実心をもって、ブツかってゆかねばならない。落語に「小言幸兵衛」というのがある。熱心な念仏爺さんで、毎日、朝から晩まで念仏をとなっている、それはいいのだが、念仏とゴゴトがチャンポンに出て来て、念仏しながら、妻君を叱ったり、小僧にゴゴトをいったりしたのでは、折角の念仏も何もならない。マゴコロの念仏ではない。口と心とがくいちがってしまふ。本当に心の底から湧きあがって来た念仏なら、そんなことにはならない。

「内外明闇をえらばず、みなすべからく真実なるべし。故に至誠心と名づく」

と書かれてあるのが、それである。内外、うちとそと、心に思うことと体ですること、これがピッタリと一つになつて、少しのくいちがいもないこと。これが真実心であり、至誠心だというのである。

「あの人もいいけれど、ブルからなあ」

体裁ばかり気にしたり、実力以上に背のびすると、こう

いわれる。「えらブル」「美人ブル」「金持ブル」など、ブルには色々あるが、どれもこれも感心したものではない。いわんや「信心家ブル」のもよくないことである。中味と外側がちがう、というよりは、中味の貧弱なのを、外側のカザリでゴマかすわけである。ところが、人間という動物

今日一日の尊さ

○行きつまつたら、やがて打開する時が近ずいたと知る。

○今日与えられたるわが役目――為すべきつとめを、全力ささげて為しゆこう。そのほかに何がある。

○闇夜はいつまでもつづくものではない。夜更けて暁は近い。○如来はよろしきにはからいたもうの信、浄土に生き生くる明るいのぞみをもって、同朋と手を携えて明るくつき進もう。

○一切は動いてやまぬ。私も変る他も変る。わが国も変る。国際状況も変る。変らぬものは、この世にはない。刻々にかわつ

てゆく。変らぬものは「変る」という真理、不断に生き進む真生命。

○「諸行は無常なり」と仏陀は説かれた。

○災難からまぬかれてよろこび災難にあつても悲観せず、力強く前進する。やがて禍は転じて福となる。

○病がなおれば、なおって感謝しなおらなくても、どこか心安らかな心境がある。病の時は生死を如来にまかせて医師の指図のままに養生するから同じ病でも重きを転じて軽く受けることができる。

○もうかって喜び、損しても感謝の心を失わぬ。(藤井実応)

は厄介なもので、見栄を張ったり、外見を気にするものが多い。念仏もそうで、ただ、口先だけでとなえたり、人前でだけでもっともらしく唱えて、マゴコロがお留守になりがちである。宗祖はこの点を深くいましめられて、中味と外側、こころとおこない、こまかくいえば「からだとくちとこころ」の三業(ごう)がピッタリと一つになるように努力することを教えられているのである。

要するに「ブラない念仏」である。

三 水中のゴムマリ

「二には深心(じんしん) 深心というはすなわちこれ深く信ずるの心なり」

宗祖はサラリと流しておられるが、これはなかなか大切な文であつて、この短い文章のうちに、浄土信仰の真髓がひそんでいるともいえよう。

「深い」ということは、味うべき言葉である。底の浅い谷川はかしましい音を立てて流れるが、青々と水をたたえた淵は、森閑と静まりかえっている。その底にはいうにいわれぬものをたたえているようである。人間の智慧にしても浅いより深い方が床しい。何によらず、深いということはいよいことである。

念仏する心もむろん同じであって、浅い心でしたのは、小言幸兵衛の念仏になってしまふ。深い心でしなければならぬ。それも

「深心とは骨髓に徹するなり」

と觀經義記に述べられているように、底の底までもぐり込んでの念仏である。

では、そんなに深くもぐり込んで、一体、何を見つげようとするのであるか。これに二つある。選択集の文をかかげると、次の如くである。

「一には決定して深く信ず。自身は現に是れ罪惡生死の凡夫、曠劫（こうごう）よりこのかた常に没し、常に流転して、出離の縁あることなしと」

「二には決定して深く信ず。かの阿彌陀仏は四十八願をもつて、衆生を攝取したまう。疑いなく、うなおもいなく、彼の願力に乗じて、定めて往生を得と。……」

一つには、自分の罪深いことを信ずる。一つには、仏の本願力を信ずる。底なしの信の大海に深くもぐつて、この二つのものをみつけ出し、この二つのものをここに深く骨髓に徹するまでに刻みこむ。これが「深心」なのである。ゴムマリを水に沈めて、手をはなすと、ポカンと水面に浮ぶ。深く沈めれば沈めるほど、いきおいよく浮き上つ

て、スポンと水面からはねあがる。これと同じに、自己の罪業の深さを感じれば感ずるほど、仏の本願力の強さが増して感じられるのである。いつかも書いたことだが、山嶺は、遠くから眺めているよりは、その麓に立ってあおぎ見るほうが、高くみえる。仏の偉大さも、自分というものをふりかえって、その罪の深さを反省するときにこそ、はっきりと知ることが出来るのである。

対等に、面と面とむき合わせての信仰は、少くとも、浄土教の信仰ではない。いや、それは「信仰」とはいえないかも知れない。浄土教の信仰は「迎信」あおぎ信ずるのでなければならぬ。いつわらぬ、現にあるがままの「自分」を、徹底的に追い求めて、海底の底の底までもぐりこんでそこから、ふりあおぐ信仰でなければならぬ。

そうしてこそ、今度は逆に、仏の本願力が、いかに偉大であり、絶妙であるかが、胸の中に、アリアリと映し出されるのである。

この二つのことを、信機、信法という。信機というのは自分の機根、すなわち、自分の信仰的能力がいかに貧弱であるかということを知覚することであり、信法というものは、弥陀の本願力を素直に信ずることをいうのである。宗祖は、このことを「二種信心」と名づけて、車の両輪のご

とくそのいづれを欠いても、「深心」とはいえないとされた。

まづ、水中深く、身を沈めること。これが水泳上達の要諦とされる。沈めば浮くのである。はぢめから浮こうとするから、沈むのである。二種信心はこのことを示めしてい

るのである。くれぐれも、浮こうなどとは思わずに罪業の淵に、深く深く、身を沈めることが、念仏を申す第一歩であることに、心をとめて頂きたい。

四 ドライブの心得

求め得ぬ芥子

ある金持の家で、かわゆいさかりの三つになる男の一人子が死んだ。若い母親の悲しみ方は一通りでなく、死んだ子供の側から離れずに泣いていた。その

つたが、氣の狂った点はどうすることもできなかった。人々はただ哀れげにその母親を見送るばかりで、もとより手の下しようがなかった。ある親切な人があって、いかにもその母親の狂態を見かねて、こう教えた。

母親は遂に氣が狂って、家人のとめるのも聞かずに、冷たい骸を抱いて街に走り出た。そして人に会う度に、

「あなたを救ってくれる人は、祇園精舎のみ仏があるばかりです。そこへゆきなさい。あるいはお子さんの病氣すら癒して下さらないとも限りません」

「この子の病氣を癒してくれるお医者はいないか」と質ねるのであった。

若い母親はこれを聞いて、大いに喜んだ。さっそくに精舎に詣でて、世尊に会い。

これをみた街の人々は、若い母親に心からの同情をして、一諸に泣き悲しんでくれるのであ

「この子の病氣を癒して下さい」と願った。世尊は静かにその様

子をご覧になっていたが、やがて「女よ、この子の病氣を癒すには芥子の実が要る。五六粒でよいから貰ってくるがよい」と申された。

若い母親は、芥子を貰ってこいという余りにも容易な世尊の仰せにすっかり喜び、勇んで出かけようとした。すると世尊は

「然し女よ、その芥子の実は、その家系において、まだ一度も死人

の出ない、葬式を出さない家から貰うて来ねばならぬ」といわれた

しかしすでに狂っているその母親は、世尊のいわれた言葉の意味がよく判らず、ただ芥子を貰うために街に出て行った。しかし誰

にも判るように、芥子の実を求めることは、まことに容易なことである。しかし死人の出たことのない家を求めても、それはできない事である。女はついに世尊のいわれた芥子の実を求めることができなかった。

街の中をあちこちと探し求めて疲れきった母親は、ここに初めて世尊の仰せになった言葉の意味を理解することができた。

そこで夢から覚めたように気がついた女はわが子の冷たい骸を墓場に運び、ねんごろに葬った。

葬儀を終へた若い母親は、再び世尊のもとにゆき、お弟子の一人に加えて頂いた。

極樂へドライブするにあたっては、誰でも思うことは、「極樂へ行こう」という決心である。「ゆこう」というところがなければ、出発することもできないし、また、ゆくについての、いろいろの準備もとのわない。ガソリンをつめたり、極樂への地図をしらべたり、といった用意は、すべて、この「極樂へゆこう」という決心にあたるわけである。これが

「三には廻向発願心」

といわれるところで

「廻向発願心」というのは、過去及び今生の身、口、意業に修するところの、世出世の善根及び他の一切の凡聖の身、口、意業に修するところの世出世の善根を随喜せるこの自己の所修の善根をもって、悉くみな眞実深心の心中に廻向して、かの国に生ぜんと願ず。故に廻向発願と名づくるなり」

自分がおこなって来たあらゆる善行、また他人のおこなって来たあらゆる善行、そうしたことをおこなおうとするところを、すべて極樂にうまれようというところにふりむけて、どうしても、極樂にうまれたいと決心することが廻向発願心なのである。

観光旅行に出かけるにしても、いま思い立って、いま出

発出来るというわけにはゆかない。

ふだんから、心がけて貯金もし、時間のヤリクリも都合をつけ、準備万端ととのえてこそ出かけられるのである。極樂ゆきのドライブも、ふだんから、そうした心がけで、こころをすべて弥陀仏にふりむけておかねば、決行することとは不可能である。

そして、そのふだんの心がけの中には、自然に、前にのべた二つのところ、至誠心と深心とがそなわるようになって来るのであって、

「また、廻向発願して生ぜんと願ずる者は必らずすべからく、決定して眞実心（至誠心）中に廻向し願じて、得生の想いをなすべし。

このところ深く信ずること深心なおし金剛のごとく、一切の異見、異学、別解、別行の人等のために動乱破壊せられず。ただこれ決定して一心に投じ、正直に進んで、かの人の語を聞きて、すなわち進退し、心に怯弱を生ずることありて、廻願落道して、すなわち往生の大益を失うことを得ざれ」（カツコは筆者）

といましまされている。「極樂へゆくんだ」と固く決心して、他人がトヤカクいっても、これには一切まどわされずに、しっかりとハンドルをにぎって、わき目をふらず、地

図にある道をまっすぐに「極楽へのドライブ」に踏み切らねばならぬのである。

一切のことがらを、一つの目的に統一すること。これが成功の秘訣である。往生極楽の秘訣もこれと同じで、常住坐臥、たえずこのことを心に刻んで、すべての行為を念仏に統一して、こころを弥陀一仏に帰依させることが肝要である。
(文学博士)

あとがき

◇佐藤密雄先生から有名なしょうまん経のお話を頂きました。先生はロータリークラブの有力な会員として、鎌倉地区になくてならぬ方であります。先般日本で開催された総会では、世界の会員を大仏殿に招く等大活躍をされ、次の会議では渡米される予定です。

最新刊 浄土トラクト

村瀬秀雄著

月影抄

御法語の栞り

本誌「扉の御法語」として毎月執筆中のなかから著者が七篇を選んで解説を付して新らたに浄土トラクトの一編として刊行

目次

- 一、上人のご日常（われ聖教を見ざる日なし）
- 二、浄土宗の意義（われ浄土宗をたつる心は）
- 三、道を求む（かくの如くして昨日もいたづらに暮れぬ）
- 四、決定の信（我は烏帽子もきぬ法然房也）
- 五、弥陀名号の功德（無礙光とは）
- 六、信仰のすがた（つみは十悪五逆のものも）
- 七、念仏を勧める（不怪大士の杖木瓦石を）
- 八、あとがき

東京都千代田区飯田町二ノ八

申込先 法然上人鑽仰会

振替東京八二一八七番

「浄土」購読規定

一部 定価 金五十円

(送料 六円)

会費一力年 金六〇〇円

(送料 不要)

浄土 正月号

昭和十年五月廿日

第三種郵便物認可

昭和三十六年十二月廿五日 印刷

昭和三十七年一月一日 発行

定価 五十円

編集人 村瀬秀雄

発行人 佐藤密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 新光社印刷株式会社

東京都千代田区飯田町二ノ八

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京三三二五九四番

振替東京八二一八七番

大正大学

学長 青木道晃 東京都豊島区西巢鴨四丁目

- 特色
1. 西と東、右と左の中道を行く仏教精神が本学建学の基礎である。従って、穏健中正、操守高き学生を育成することを目標とし、教授凡てが身を以て指導している。
 2. 学生は、入学と同時に専攻別による13の研究室に所属して夫々の教授から指導を受けるほか、研究室の豊富な蔵書を利用して勉強できる。

専攻

文学科＝国文学、英文学、史学、西洋哲学、宗教学
中国学、社会学、社会事業の8専攻
仏教学科＝仏教学、梵文学、天台学、真言学、浄土学の5専攻
大学院＝修士コース、博士コース（仏教学、宗教学、国文学）

昭和37年度1年の募集人員は200名、試験科目は、国語（漢文をふくむ）社会、外国語（英、独、仏のうち一つ）
試験期日 3月27日・28日（火・水）詳細は入学案内を参照のこと



日本一の生産・設備

梵鐘 (45cm～85cm)

在庫豊富

喚鐘 (12cm～51cm)

音響物理学博士青木一郎先生

梵鐘界の権威 日展 芸術院賞受賞 香取正彦先生

日本最初の黄綬褒賞
(昭和三十年四月廿七日)

鋳物師 老子次右衛門翁

大阪市北区曹根崎町一丁目

大阪ヨリ十五分（梅田新道大映横東へ一丁右側）

株式会社

老子製作所 大阪支店

電話大阪(34) 8847番 本社工場 高岡市横田